

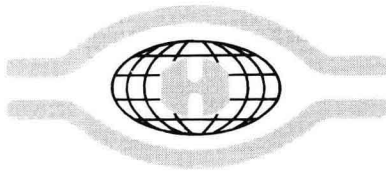
HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界 大百科 事典

25

ハナーヒモ

平凡社



世界大百科事典 25

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人	下中邦彦
発行所	平凡社
	郵便番号102 東京都千代田区三番町5 振替東京8-29639番 電話03(265)0451番

本文用紙	十条製紙株式会社
グラビア 多色オフ用紙	山陽国策パルプ株式会社
見返用紙	日清紡績株式会社

本文写植製版	フォト印刷株式会社
本文印刷	株式会社東京印書館
グラビア 多色オフ製版印刷	株式会社東京印書館 株式会社光村原色版印刷所

クロース	ダイニック株式会社
表紙箔押	斎藤商会
製本	株式会社石津製本所

●見出しのつけ方●

《表音見出し》

1. 日本読みのものは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのものは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

《本見出し》

1. 日本読みのものは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のものはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本読みと外国読みとの合成したものは、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

《項目配列の方法》

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のものは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能なかぎり現地読みに近いものをとったが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字への置きかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o x=k χ=ch
 - b. ロシア語
а=a б=b в=v г=g д=d
е=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
о=o п=p р=r с=s т=t
у=u ф=f х=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ь=' ы=y
ь=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。

berg〔スウェーデン〕〈ベリー〉 Strind-berg ストリンドベリー
cu〔スペイン〕〈クァ・キ・クェ・クォ〉 Ecuador エクアドル
d〔独〕語末では〈ト〉 Wieland ヴィーラント
de〔仏〕〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール
dou〔仏〕〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル
du〔英・仏〕〈デュ〉 Durand デュラン
ド; Dumas デュマ
du〔独〕〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト
er〔英・独〕語末では〈アー〉 Parker パーカー; Herder ヘルダー
g〔独〕語末では〈ク〉, ngは〈ング〉, igは〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク;
Lessing レッセング; König ケーニヒ
gn〔仏・伊・スペイン〕〈ニャ・ニユ・ニエ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニ
ュ; Bologna ボローニャ

gu〔伊・スペイン〕〈グァ・グイ・グェ・グォ〉 Paraguai パラグアイ
ia〔一般〕語末では〈イア〉 Asia アジア
io〔伊〕〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカッチョ; Giorgione ジョルジョーネ
j〔スペイン〕〈ハ行音〉 Juárez フアレ
ス
je〔一般〕〈イエ〉 Jena イェーナ
ley〔英〕〈リー〉 Huxley ハクスリー
ll〔スペイン〕〈リャ・リョ〉, 南アメリカでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カスティリャ; Trujillo トルヒョ
oi, oy〔仏〕〈オワ〉 Boileau ボワロー
pf〔独〕〈プ〉 Pfizner ピッツナー
ph〔ギリシア〕〈フ〉 Aristophanes アリストファネス
qu〔伊・ラテン〕〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Quirinius クィリニウス
ray〔英〕〈レー〉 Thackeray サッカレー
son〔英〕〈ソン〉 Edison エディソン
sp, st〔独〕語頭では〈シュプ・シュト〉 Spranger シュプランガー; Storm シュトルム
stew, stu〔英〕〈スチュ〉 Stewart スチュアート; Stuart スチュアート
swi〔英〕〈スウィ〉 Swift スウィフト
thi, ti〔一般〕〈ティ〉 Thiers ティエール; Tiziano ティツィアーノ
thu, tu〔独・ラテン〕〈トゥ〉 Tum-
lirz トウムリルツ; Tacitus タキト
ウス
thū, tū〔独〕〈チュ〉 Thurnau チュル
ナウ
tou〔仏〕〈トゥー〉 Toulon トゥーロン
tu〔英・仏〕〈チュ〉 Tunisia チュニジア
v〔ラテン〕〈ウ〉 Vergilius ウェルギリ
ウス
v〔スペイン〕〈バ行音〉 Verasquez ベラ
スケス
w〔独〕〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー
x〔一般〕〈クス〉 Xenophon クセノフ
ォン
y〔ギリシア〕〈ユ〉(拗音) Dionysos デ
イオニッソス
zi〔独〕〈チ〉 Leipzig ライプチヒ; た
だし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann ツ
ィンマーマン
zi〔伊〕〈ツイ〉 Venezia ヴェネツィア
zü〔独〕〈チュ〉 Zürich チューリヒ

●符号・記号●

《かこみと送り》

- 【 】 中見出し語をかこむ。
〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢字および本文中の小見出し語をかこむ。
《 》 書名または題名をかこむ。

- 〈 〉 引用文または語句，とくに注意を
うながす語，書名または題名以外
の編または章などの表題をかこむ。
() 注の類，または読みがなをかこむ。
[] 日本地名の国・県・区・市・町・
村をかこむ。
⇒ 該当項目への送り
→ 参照項目への送り

《漢字略語》

国名・地名の略語を用いる場合は，つぎ
の13種にかぎって使用する。

アメリカ(米)；イギリス(英)；イタリ
ア(伊)；インド(印)；オーストラリア
(豪)；オランダ(蘭)；ソヴェト(ソ)；
中国(中)；ドイツ(独)；日本(日)；フ
ランス(仏)；モンゴル(蒙)；ヨーロッ
パ(欧)
ただし，戦争，会議，協定など特定の場
合にかぎって
アジア(亜)；アフリカ(阿)；オースト
リア(奥)；トルコ(土)；プロイセン
(普)；ロシア(露)
などの略語も用いる。

《科学記号または略符号》

a	アール
A	アンペア
Å	オングストローム (=10 ⁻⁷ mm)
A. D.	紀元後
atm	気圧
Aufl.	版
[α] _D ²⁰	比旋光度(20℃における ナトリウム D線に対し)
B.	湾
bar	バール
B. C.	紀元前
Bé	ボーメ度
BTU	英熱量
c	サイクル
C.	岬
℃	摂氏温度
ca.	年数の大約を示す。
cal	カロリー
Cal	大カロリー
cgs	絶対単位
cm	センチメートル(cm ² 平方 センチ，cm ³ 立方センチ)
const	定数
d	デシ(=1/10)
d ¹⁵	比重(15℃における)
d-	右旋
D.	砂漠
dB	デシベル
deg	度(温度)
dyn, dyne	ダイン
E	東経
emu	電磁単位
eV	電子ボルト

F	ファラッド
°F	華氏温度
ft	フィート(ft ² 平方フィー ト，ft ³ 立方フィート)
g	グラム
G	ギガ(=10 ⁹)
G.	湾
gwt	グラム重
h	時
ha	ヘクタール
HP	馬力
Hz	ヘルツ
in	インチ(in ² 平方インチ， in ³ 立方インチ)
I.	島
Is.	諸島(列島)
IU	国際単位
k	キロ(=10 ³)
K	絶対温度
kc	キロサイクル
kcal	キロカロリー
kg	キログラム
km	キロメートル(km ² 平方キ ロ)
kV	キロボルト
kW	キロワット
kWh	キロワット時
l	リットル
l-	左旋
L.	湖
lb	ポンド
lm	ルーメン
l. t	ロング・トン
lx	ルクス
m	メートルまたは分
m-	メタ
M	メガ(=10 ⁶)
Mc	メガサイクル
mb	ミリバール
mg	ミリグラム
mks	mks単位
mm	ミリメートル

mmHg	水銀柱の高さ(mm)
mol	モル
Mt.	山
Mts.	山脈，山地
mμ	ミリミクロン(=10 ⁻⁹ m)
μ	ミクロまたはマイクロ (=10 ⁻⁶)
μ	ミクロンまたはミュー (=10 ⁻⁶ m)
μμ	ミクロミクロンまたはミ ューミュー(=10 ⁻¹² m)， ただしmμをμμとも記す。 ナノ(=10 ⁻⁹)
n	屈折率(15℃におけるナ トリウム D線に対し)
n _D ¹⁵	規定，または北緯
N	号，または番
Nr.	オルト
o-	オンス
oz	ピコ(=10 ⁻¹²)
p	パラ
p-	P.
pH	半島
ppm	水素イオン濃度指数
PS	ピーピーエム(=10 ⁻⁶)
R.	メートル馬力
rpm(h)(s)	川
S	1分(時)(秒)間回転数
S.	南緯
sまたはsec	海
s. t	秒
St.	ショート・トン
t	海峡
V	トン
W	ボルト
Ω	ワット，または西経
/	オーム
%	生没年などの年数の両説 を示す。
%	パーセント
♂	パーミル
♀	雄
	雌

《地図記号》

記 号	各 国 地 図	分 県 地 図
	国境	県境
	省・州・県境	
	鉄道	国鉄
	特殊軌道	私鉄
	運河	特殊軌道
	主要道路	国道
		鉄道連絡線航路
	パイプライン	
	首都	都道府県庁所在地
	主都(省・州・県)	市
	大都市	
	中都市	町
	小都市・町，その他	村・字，その他
	山頂	山頂
	峠	峠

注 その他慣用化している記号は適宜使用した

別刷図版目次

ハナショウブ	13～14
埴輪	31～32
バラ	81～84
パリ	117～120
バレエ	169～170
バロック美術	187～190
版画	207～212
磐梯朝日国立公園	261～264
ピエロ・デラ・	
フランチェスカ	329～330
ピカソ	347～350
飛行機	383～386
ビザンティン美術	403～404
菱川師宣	421～422
ヒト	487～490
雛人形	507～508
ヒマラヤ	541～544
姫路城	553～554

ハナ Marcus Alonzo Hanna 1837～1904 アメリカの資本家、政治家。オハイオ州に生まれ、雑貨商から身を起し、19世紀後半の産業資本主義の発展の波に乗って、石炭、鉄鉱、船舶、銀行、新聞などの事業に関係して産をなした。1890年以来政治に興味をもち、マッキンリーの後援者として勢力をふるい、彼をオハイオ州知事に当選させるのに力を尽くした。96年の選挙には共和党全国委員会の委員長としてマッキンリーを大統領に当選させるために資金を集め、彼自身も97年以来上院議員となった。大実業支配の政治を実現させるために大いにその手腕をふるった政党ボスの1典型として有名である。(中屋 健一)

はな 花 【花の名の由来】花は、遠い昔から、人間の生活に詩を与えてきた。西洋では妖(よう)精という不思議な精霊が実在したと信じられていた時代に、多くの花はこれらにまつわる伝説や物語に基づいて名づけられたといわれ、花の名をめぐる神話・伝説をはじめ多くの文学作品は美しい詩を語っている。スイセンはギリシアではナルキッソスと呼ばれ、美少年ナルキッソスの悲しい物語と結びついてあまりにも有名だし、ヒヤシンス、ラッパズイセン、サンシキスマイレ、ワスレナグサなど、その名の由来をめぐる物語は現在も多くの人々に好まれている。また花は季節の訪れを人々に告げる。春の訪れを告げる花は、日本ではウメ、ヨーロッパやアメリカではマツユキソウ(スノードロップ)からラッパズイセンとされている。マツユキソウは、まだ雪の消え残った野原に、雪の中から小さな釣鐘形の白い花を開くので、スノードロップ(雪のしずく)と名づけられたといわれ、ドイツではくはだかの処女〈雪の花〉〈雪のしずく〉などと呼ばれている。日本でもユキノハナと呼ぶこともある。このように、花の名は多くは主観的に花の形、性状、あるいは開花季節によって命名されることが多く、スズラン(リリー・オブ・ザ・ヴァリー、谷間のヒメユリ)、ケマンソウ(ブリーディング・ハート)なども、かれんな花の姿をあらわすに十分な名称といえよう。このような名称の由来とともに、花に付託された〈花言葉〉(その項参照)は、また人々の詩情を誘うものがある。ところで以上のような花の名はどこでも通用するわけにはいかないで、学術上ではそれらを〈俗名〉といい、世界的に通用する名称として〈学名〉を用いている。学名は属名と種名(および変種名、品種名など)によってつくられ、属名も種名もそれぞれの意味をもち、正式には最後に命名者の名を合わせて書くことになっている。たとえばコスモスの学名はコスモス・ビピンナトゥス *Cosmos bipinnatus* Cav. であり、コスモスは属名で〈飾り〉の意、ビピンナトゥスは種名で〈葉が2回羽状になる〉の意、最後の略字はスペインの植物学者カバニリエス Antonio José Cavanilles (1745～1804)の命名を意味している。

【日本の花】日本の国土は寒帯から亜熱帯地域の広範囲にまたがる関係から、植物の種類に恵まれ、古来花を愛好し、趣味家は深い研究を積んできた。サクラ、

ツツジ、ツバキ、サクラソウ、キク、ナデシコ、ハナショウブなどの改良には世界に誇るものがある。また山野に自生する花木を採集し、はちに移して栽培するいわゆる盆栽法は、園芸技術の粋として今日〈いけばな〉とともに欧米人からも注目されるに至っている。早春に咲くボケ、ツバキ、ジンチョウゲ、カイドウ、晩春のボタン、アジサイ、ソケイ、フジ、盛夏のハナアカシア、ザクロ、フヨウ、秋のビワ、チャ、ヤツデ、モクセイ、冬のマンサク、ウメ、サザンカ、サンシュユ、ロウバイなどは四季を通じての花木の代表といえよう。また現在、公式に国花に決定されたものではないが、〈日本の花〉として、サクラまたはキクが用いられ、〈郷土の花〉〈県花〉として各都道府県を代表する名花も選定されている。なお付記しておくべきことは〈秋の七草〉のことである。〈春の七草〉はいずれも食用とした草本を集めたものであるが、秋の七草はすべて寂しい秋の山野を色どるにふさわしい優雅な草花から取ったところに作者の苦心とゆかしさがうかがわれる。この秋の七草の起原は、春の七草と同様に1,200年あまり前にあたる文武帝の時代に、遣唐使粟田真人に随行した山上憶良が作った旋頭歌(せどうか)の〈秋の野に咲きたる花をおよび折りかきかぞふれば七種の花〉〈萩(はき)の花、尾花、葛(くず)花、撫子(なでしこ)の花、女郎花(おみなえし)、また藤袴(ふじばかま)、朝顔の花〉というのが起りはじめと思われる(〈秋の七草〉の項参照)。

【外国の花】花を日常生活の必需品同様に考えている西洋では、訪問はもとより、ことに冠婚葬祭にはぜいたくなほど多量の花を使うのみでなく、室内に、あるいは庭園に植えて楽しむほか、各国にはたいてい〈国花〉(その項参照)が定めてある。特にアメリカ合衆国では独立直後から各州はそれぞれその土地の特産種ないし州民から最も親しまれている観賞花卉(かき)1種から2種を州花として選び、祝日、あるいは儀式的装飾用、また意匠用などに広く用いられている。またスイスの高原に静かに育つ名花エーデルヴァイスは未来永遠に絶えることなく、詩に歌にその名は世界の名花としてうたわれて、かれんな花を代表するもの一つである。熱帯地方に原産する花には警戒色に色どられた華美な珍花がある。直径1mに及び、その巨大さを誇示するラフレシア(スマトラ産、ウマノスズクサ科)、コンニャクを思わせるアマルフォファルス・ジルガントゥス(熱帯アジア、アフリカ産、サトイモ科)、スパトデア(火炎木、熱帯アフリカ産、ノウゼンカズラ科)というマメの花に似たチョウ形の美花をふさ状につけるもの、南米アマゾン川産で、たらいのような大葉をもつオオニバスの清そな純白花、パイボグザラの和名で知られるアリストロキア(ブラジル産、ウマノスズクサ科)、長く美しいがくをたらすストロファンツス(金竜花、アフリカ、マライ産、キョウチクトウ科)、根から花を出すスタンホペア(星入香蘭、南米ブラジル産、ラン科)などがある。日本各地の山ろく帯に自生するクマガイソウ、アツモリソウ(ラン科)の奇形花もまた珍花である。

【花の利用】日本では古くからもっぱら

〈生花〉として、切花にして、各種の行事に、また祭典用に広く用いられた。そのほか、サクラソウ、ナデシコ、ハナショウブ、キクなどには、はち植えが行われた。欧米文化の移入に伴ない、花の集団美を觀賞する目的で花壇にする形式がしだいに増してきた。切花やはち植法が家庭本位なのに対して、花壇は今日では都市の広場に設けられ、建築美を背景にもつ景物として広く応用されている。切花用には水揚げがよく花もちの長い種類を、はち植用には花期が長く鮮美な色彩のもの、また花壇植えにはだいたい草の高さが低く長期間続開する種類から選定される。なお〈永久花〉と呼ばれる花の種類、たとえばカイザイクムギワラギク、センニチコウ(千日紅)、キセランサマム、ロダンゼ、アクロクリニウムおよびスターチスのような革質の花弁をもつ種類は、切花として、陰乾し、美しいかごに盛って室内装飾に供される。それぞれの花による用途は、新品種の登場とともにますます広範囲にわたってきた。花の利用の多寡はその国の文明の尺度であるという言葉は味わうべき言葉である。以上のほか、春の花、夏の花など季節によって咲く花、熱帯植物など、開花を早めて觀賞する目的から、特に温室で各種の花が栽培される。

さて、花の色に対して園芸家はカラー・チャートという標準色を規定し、およそこれによって呼んでいる。最近園芸技術の進歩に伴ない、新品種が作成されて、花の色に対する関心がいっそう高まり、いままでになかった色彩をもった花が求められるようになってきた。珍奇を好むところから、黒い花が喜ばれたときもあった。野生品種ではあるがクロリヤ、そのほか黒ダリア、黒スイセン、黒チューリップ、黒バラ、黒カイウなどである。先年灰色のバラの出現に続いて、キク科のマリーゴールドの白色花を作ったものに膨大な賞金が約束され、話題を呼んだ。花のかおりもつねに人の心を誘う。しかし濃厚な色調の花には香気のない種類が多く、反対に比較的薄い色の花、あるいは地味な色彩の種類には芳香を放つものが多いのは興味深いことである。著名な花を拾えば、草本ではカーネーション、ステヴィア、アラセイトウ、ニオイアラセイトウ、モクセイソウ、バイオレット(ニオイスマイレ)、スイートピー、マーガレット、アリッサム、ヘリオトロップ、スズラン、ジンジャー、フリージア、テッポウユリ、ヒヤシンス、スイセン、バニラなど、また木本の例としては、バラを筆頭として、モクセイ、ジンチョウゲ、クチナシ、ライラック、ケストルム・ノクトゥルヌム(夜香木)、タイサンボクなど、いずれもなじみ深い種類で、これらのうちのある種のもは、花の一部をアルコールに浸出させて天然香水や食品のかおりつけの原料とする。なお、人種あるいは習慣などによって、かおりに対する相違があり、東洋人にはあまりかんばしくないと思われるナスターチウム(キンレンカ)、ゼラニウム(モンテンジクアオイ)、ペチュニア(ツクバネアサガオ)、マリーゴールド(クジャクソウ)、ランターナ(シチヘンゲ)などのもつ一種のにおいを西洋人はむしろ良いかおりとして親

しんでいる。また花のかおりは、栽培地の気候、風土、あるいは湿度などによって全く芳香を失うことがある。一方、リカステ、スタンホペア、クリ、ドクダミ、ニンニク、クサギ、キョウチクトウなどは、満開期には実に不快なかおりを発散するので、これを庭園に植えることを避けるが、花粉が豊富でミツが多量のため、チョウやガは好んでこれらの花に集まる。

次に花は、種類により、天候、湿度あるいは環境などによって多少の差異はあるが、それぞれ開花する時刻が一定していることは興味ある現象である。ふつうは昼間に咲くものが多いのであるが、夜間に開く種類も相当観察される。たとえばツキミソウ、オオマツヨイグサ、チュベローズ(月下香)、ヒロカクタス(月下の美人)、ヨルガオ(夕顔)、熱帯性スイレンはそれである。リンネが花の開花時刻をウブサラの地を標準として発表したところによれば、ハス(4～5時)、アサガオ(5～6時)、リンドウ(6～7時)、フクジュソウ(7～8時)、タンポポ(8～9時)、ユキワリソウ(9～10時)、サフラン(10時)、チューリップ(11時)、スマレ(12時)、ナデシコ(13時)、キキョウ(14時)、オニアザミ(15時)、ツユクサ(16時)、ヨルガオ(17～18時)、ツキミソウ(19時)とされる。そのほか、スベリヒユは12時に開花し、日本各地の池沼に自生するヒツジグサは文字どおり羊の刻(午後3時)に開くとか、フォア・オクロックの名称で呼ばれるオシロイバナは午後4時に咲くなどは、東西を代表するよい対照といえよう。これらの花を応用して造られたものが<花時計>(その項参照)である。

美しい花をもつ薬草も少なくない。そのうち観賞価値の高い種類数種を述べておく。これらは学問上の薬用植物は少なく、いわゆる民間薬の中から列記したものである。リンドウ(秋株分け、健胃剤)、スマレ(秋まき、秋株分け、茎と葉は浄血剤、利尿剤)、ナデシコ(秋まきまたは秋株分け、種子はせんじて利尿、水腫(すいしゅ)に有効)、イチハツ(秋株分け、茎または根は乾燥しせんじて利尿緩下剤)、アマドコロ(秋株分け、茎はゆでて食用とし、乾燥した根は吐剤、粉末としたものは打撲傷または痛みに塗る)、ジャクヤク(秋株分け、根の皮をはぎ、頭痛、腹痛、けいれんに用いる)、カノコソウ(秋まき、または古株は10月株分け、かわかした根は鎮けい剤)、セージ(春まき、全薬に芳

香があり、香辛料とする)、キキョウ(種子は春まき、秋株分け、根はかわかして、せき止め、たんきり剤)、サフラン(9月に球根を植え、花柱をかわかしたものを鎮けい剤、鎮静剤に供する)、ジギタリス(春、秋まき、秋株分け、心臓病)。

また日本では昔から菜の花のつ作物、フキのとうのみそあえ、サンショウの花芽のつくだ煮、黄ギク、白ギク、食用ギク(金唐松)の酢あえ、風味あるシュラン、サクラの塩づけなどが季節の食ゼンに供される。西洋ではハナヤサイ(カリフラワー)、キダチハナヤサイ(ブロッコリー)、アーティチョーク(チョウセンアザミ)など、珍味であり、栄養の点からも花を利用した野菜として、実用となるものが少なくない。(吉津 良恭)

【日本における花(花卉)、球根の生産・流通】〔花(花木、枝物を含む。以下同じ)〕1978年(昭和53)のおもな切花類の作付面積および出荷量を、農水省の調査によってみると、(1)キクは3,630ha、13億5,500万本(うち電照ギクは770ha、3億1,110万本)、(2)カーネーションは311ha、4億6,150万本、(3)バラは225ha、2億300万本となっている。出荷量の多い都府県は、(1)では愛知、長野、静岡、福岡、香川で、この5県で全国の47%を生産する。(2)では長野、愛知、兵庫、千葉、静岡が多く、この5県で全国出荷量の59%を占める。(3)では神奈川県、静岡、長野、千葉、愛知の順で、この5県で全国の50%を占める。また花の生産出荷地として特色のある地方をあげると、安行(埼玉県)の枝物、房州(千葉県)の露地花卉、伊豆(静岡県)の促成花卉、信州(長野県)の高冷地花卉、渥美(愛知県)の抑制花卉、淡路(兵庫県)の促成花卉などがある。花の総生産量は、花の種類が多く、荷造の単位も俵、梱(こり)、木箱、束など区々なので、数量的にはあげにくい、切花類の栽培面積は全国で9,860ha、生産額は767億円となっている(1977)。

花は現在各個人の自由な生産・出荷によっている場合が多く、団体などで生産・出荷の調整をおこなっている例はまだ少ない。一方、生花市場、つまり花の卸売市場については、現在、開設または取締上に特別の法規がなく、個人または法人などの自由企業となっていて、その数も正確なところは不明であるが、全国で約210の生花市場があるものと見られている。花の生産者は、青果物の場合と同様に、生花市場に委託販売とするのが一般であり、これを生花小売業者が直接くせる)のが普通である。この場合の生花市場の卸売手数料は、1割が一般である。次に花の輸出は、一部がシンガポール、タイなどに仕向けられている程度であるが、欧米各国のフラワーショーなどには、先方からの勧誘によって、花の生産者団体などが、キク、洋ラン、カーネーションなどを出品する機会が毎年あり、好評を博している。また台湾、タイ、アメリカなどからの輸入が増加している。

〔花卉球根〕一方、花卉球根類は、第二次世界大戦前から輸出農産物の一つとして知られていた。最近農林省で調査されたものによると、これらは一応国内の需要を満たしたうえ、それぞれ左下表のような輸出を見る状況にある。(1)花ユリ

根 日本の花ユリ根は、第二次世界大戦前においては、世界における供給国として知られ、年間約4,000万球を輸出したこともあったが、戦時中は作付を制限または禁止され、輸出も断絶した。それが1946年(昭和21)から、生産、輸出ともに復活して、1978年は年間1,890万球の輸出を見ており、そのうち約8割までは、オランダに向けられている。(2)チューリップ球根 チューリップ球根も第二次世界大戦前から輸出されていたが、戦後その輸出は急に伸び、78年には270万球を数え、その大部分はアメリカに向けられている。世界におけるチューリップ球根の供給国はオランダであり、そのうちアメリカ向け輸出のみでも、年間1億数千万球と見られているのに比べれば、はるかに少ない。しかし、日本のチューリップ球根の生産は、主として裏日本の砂丘地、または水田裏作としての発展が期待され、また、品種別生産割合(輸出球の花色の組合せ割合)を改善することなどによって輸出の一層の増加が期待されている。なお、オランダから若干輸入している。(3)グラジオラス球根 グラジオラス球根は、戦後において急速な輸出増加を見たもので、78年には、年間約190万球の輸出があり、おもにホンコン、アメリカに向けられている。(4)その他の花卉球根 その他の花卉球根で輸出されるものは十数種類を数えるが、おもな種類は、アイリス、ナツスイセン、ダリア、アマリリス、ランタンキュラス、スイセンなどで、今後輸出の増加が期待されるものは多くはない。輸入はオランダ、韓国、アメリカなどからで、1978年は6,640万球(グラジオラス球根を含む)である。→花卉園芸 (横井 宗生・小竹 明)

花の植物学

植物学でいう花とは高等植物の生殖器官で、孢子葉とそのほかの付属的な花葉が集まったものである。高等植物とはふつう、種子植物(あるいは顕花植物)とシダ植物とをいうが、常識的には花という言葉はほとんど種子植物だけにかぎって使われる。シダ植物では、イヌワラビなどのように、孢子葉が栄養器官としての通常葉の形態と機能をもっていて、これを花と呼ぶのはふさわしくない。しかし、フユノハナワラビでは、孢子葉(実葉)が栄養器官の葉(裸葉)とはっきり分化しているので花という言葉が使われており、種子植物の花と形態的にも相同である。同じような意味でスギナのつくしも花と呼んでよいわけである。コケ類で俗に花と呼ぶのは、苔(たい)類(ゼニゴケなど)の場合は、配偶体の上に生じて、それぞれ雌、雄の配偶子を形成する生殖器床であり、蘚(せん)類(スギゴケなど)の場合は、配偶体上に付着している孢子体そのもの、ないしは孢子囊(さく(蒴))であって、意味が異なる。

花の要素は雌ずい(雌しべ)、雄ずい(雄しべ)、花弁(花びら)およびがく(萼)片である。花の本質的な部分は、孢子葉中に形成される胞原組織である。胞原組織は、孢子に相当する生殖細胞を作り出す所であって、種子植物では胞原組織、したがって孢子葉を保護するしくみがさまざまであって、花の形態を変化に富んだ複雑

日本における主要花卉球根の輸出状況

年次	花 ユ リ 根		チューリップ球根		雑 球 根	
	輸出数量 (1,000球)	同金額 (1,000円)	輸出数量 (1,000球)	同金額 (1,000円)	輸出数量 (kg)	同金額 (1,000円)
1938	35 893	3 036	?	?	—	—
1940	24 997	3 628	?	?	—	—
1949	886 372	77 106	474	2 341	698	476
1951	4 513	73 707	831	4 209	16 095	3 469
1957	5 362	143 143	7 725	34 989	273 375	46 585
1959	5 996	156 754	13 596	59 070	554 407	74 125
1961	6 404	170 731	23 202	102 211	440 931	67 789
1964	7 307	253 204	25 756	152 897	30 021	112 693
1966	8 790	310 109	13 470	82 772	23 458	107 317
1968	12 097	373 010	22 779	114 232	19 326	81 670

注 雑球根にはグラジオラス球根を含む

なものとしている。大孢子葉は〈心皮〉と呼ばれ、雌しべをつくり、被子植物の完全なものでは柱頭、花柱、子房の3部分が区別される。大孢子嚢は〈胚珠〉と呼ばれ、子房室の壁あるいは中軸に着き、中に大孢子である胚嚢細胞を形成する。裸子植物では子房を形成せず、開いたままの心皮の上に胚珠が着く。小孢子葉は雄しべをつくり、葯(やく)、葯隔、花糸の部分が区別されるが、葯以外の部分はしばしば欠けることがある。葯は小孢子嚢であって、中に小孢子である花粉を入れる。孢子葉を包む〈花葉〉は、花弁とがく片とに分化している。花弁とがく片は外見上区別のつかないこともあり、一方が欠けることもある。両者を区別しない場合には〈花被〉と呼ぶ。以上の要素が集まって花托の上について花を形成する。場合によっては、さらに外側に保護器官としての包葉(単に包ともいう)や花軸が加わって花の外観を呈することもある。

花の各要素の数と、配列、全体の相称関係などの変化によって、花にはさまざまな型が見られる。花被(花弁とがく片)のない花を〈無被花〉、花被を備えているものを〈有被花〉という。裸子植物には無被花が多く、被子植物では大部分が有被花である。がく片が緑色で、花弁が緑色以外のさまざまな色をしている場合(異被花)と、がく片、花弁に色の区別がない場合(等被花)とあるが、等被花にはさらに、両者とも緑色などで著しくない色で、かつ小形の場合(トウシンソウなど)と、両方の花被がともに美しい色を呈し大形となる場合(ユリやアヤメの類など)とがある。最後の場合には〈花蓋(かがい)〉という言葉を使うことがある。一つの花に雄しべだけをもつものを〈雄花(おほな)〉、雌しべだけがあるものを〈雌花(めほな)〉という。このような現象を〈雌雄異花〉、それぞれの花を〈単性花〉といい、これに対して雌しべと雄しべとをともに備えたものを〈両性花〉あるいは〈両全花〉と呼ぶ。雄花で退化した雌しべが、また雌花で退化した雄しべが本来の働きを失ってこん跡器官として見られることがあり、それぞれ〈仮雌ずい〉〈仮雄ずい〉と呼ばれる。

【雌しべ】被子植物の雌しべは1枚の心皮からできていることもあるが、多くの場合2枚以上の心皮がゆがして花の中心に1個の雌しべを作る。数個の心皮が一つの花の中で離ればなれの雌しべを作る場合(キンボウゲなど)もあって、これを〈離生心皮〉と呼ぶ。離生している心皮の数が多く、らせん状に密に配列し、円錐体あるいは柱状に集合した場合には、この集合体を〈雌ずい体〉と呼ぶ(モクレンなど)。雌しべの頂端の柱頭は花粉を受ける所で、粘液を分泌したり、微小な乳頭状の突起が密生している、花粉が付着しやすいようになっている。子房は雌しべの基部の室になっている所で、心皮の数と、心皮相互のゆがのしかたによって、1, 2, 3, 4, 5室あるいはさらに多数室を作っている。子房の内壁あるいは中軸上の、胚珠を着けているつけ根の部分(胎座)といい、胚珠を胎座につける柄を〈胚柄〉という。胚珠と胚柄との付着点を〈合(ごう)点〉とよぶ。胎座は心皮の中肋(ちゅう

うろく)にあたることも、その縁辺にあたることもある。子房室内での胎座の相対的な位置や、着き方によって、胎座の種類を次のように分ける。数枚の心皮の縁がそれぞれゆがし、中央に集まって、子房の中軸を形成すると同時に隔壁をなし、その軸上に胎座ができたものを〈中軸胎座〉と呼び、隣りあった心皮が、互いに接触した縁でゆがし、多くの場合隔壁を形成せず(形成することもある)、子房壁の内側に直接胎座が着くものを〈側膜胎座〉と呼び、子房の底面から独立して中軸が立って、その軸のまわりに胎座を生ずると〈独立中央胎座〉と呼ぶ。上記のうち、側膜胎座には、心皮の中肋に胎座ができる側膜中肋胎座と、心皮の縁辺に胎座ができる側膜縁辺胎座とがある。胚珠が胎座に着生する型には、胚柄の先端に直立してつく〈直生胚珠〉、胚柄の先端から基部のほうに向かってさか向きにつく〈倒生胚珠〉、胚柄と直交して横向きに、胚柄の先端で湾曲して着く〈湾生胚珠〉とが区別される。胚珠は、中央部の〈珠心〉(あるいは胚珠心)と、これを包む〈珠皮〉とからなっている。珠皮は1枚の場合と、内珠皮、外珠皮の2枚を備えている場合とがある。珠皮は胚珠の頂端で開いて、そこに〈珠孔〉をつくっている。珠孔は受精のさい、花粉管の侵入口となる。珠心には胞原組織があって、ここに生じた胚嚢細胞が胚嚢を形成する。裸子植物と総称されているものの心皮は、植物群によって互いの間にかなりの違いがある。イチョウ類では棒状の心皮の先端に胚珠が頂生し、ソテツ類では鱗片状あるいは羽状の心皮の柄の縁に胚珠が数個列生し、マツ類では鱗片状の心皮の面上に着くなどさまざまで、それぞれ根本的な相違を示している。また裸子植物の珠皮は内珠皮、中珠皮、外珠皮の3枚を区別することができる場合が多いが、2枚のものもある。多くの種類では、珠皮は珠心とほとんど全面的にゆがし、珠心の頂端の部分だけで離れて、そのすきまは〈花粉室〉と呼ばれる空所となっている。裸子植物では、胚珠が裸出しているので、花粉室が直接に花粉を受ける。

【雄しべ】雄しべは、種子植物全般を通じて、小孢子嚢である葯を必ず備えている。葯は花粉(小孢子)を入れているいくつかの袋の集まったもので、それぞれの袋は〈葯室〉あるいは〈花粉袋〉と呼ばれる。1個の雄しべにできる葯室の数は植物によって異なる。裸子植物では多数集まっているものが多いが、マツ類では2室のものもある。被子植物では4室のものが多いが、1室、2室、あるいは8室の例も知られている。葯室と葯室の間は葯隔と呼ばれる部分で、ここで葯をささえる花糸の先端につく。葯隔はほとんど目立たないこともあるが、種類によっては著しく発達し、付属体加わって、複雑な形を呈することもある。花糸もひじょうに短いものから、ほとんどなくなって葯が直接花弁の内側に着くものなどもある。花粉をつくりだす胞原組織は葯室内に発達するが、これを包む周壁の細胞層は〈絨緞(じゅうたん)細胞層〉(タベート層)と呼ばれ、花粉が完成すると消失する。花粉の形は、植物群によって区別される明確な特徴をもっており、花粉の

形態から植物の鑑定がしばしばなされている。花粉の内膜はセルロースからなっているが、外膜はふつうクチン質からなっていて、この外膜の面にあらわれる著しい模様状の突起が、いぼ状、とげ状、網目状などを呈し、花粉の全形、大きさ、色などの特徴とともに、花粉を見分ける手がかりとなっている。花粉の表面の一定の個所には〈発芽孔〉と呼ばれる小さな穴があって、花粉管が発芽するときはこの穴から出る。穴の数は1ないし数個あり、ふたがあることもある。そのような場合は花粉管はふたを開けて出てくる。雄しべは、一つの花の中で、すべて同形でない場合もあり、たとえばアブラナ科の場合には、6本のうち2本だけ小形である〈四強雄ずい〉という。また、一部の雄しべが働きを失って仮雄ずいになって、健全な雄しべと混在していることもある。花糸はふつう離ればなれになっているが、ツバキやソラマメなどでは互いにゆがして筒状になっている。キク科の花のように、花糸は離れているが葯がゆがして筒をなすものもある。

【花弁】花弁はまれに緑色を呈し、がく片と同形で、区別しがたいこともあるが、一般には色彩の変化に富み、花のうちで最も目立つ部分である。単色の場合もあるが、しばしば種類の特徴をなす多様な模様やふ入りが見られ、ことに、園芸植物では華麗なものが多い。花弁の全体をまとめて〈花冠〉と呼ぶが、花弁が互いにゆがしているときは〈合弁花冠〉、全く離ればなれのときは〈離弁花冠〉という。花弁は、数が不定で多数ある場合は配列が複雑で一見不規則にみえるが、3, 4, 5, 10枚などの少数で一定数のときは、雄しべとも、がく片とも、同数あるいはその倍数になっていて、配列も、雄しべ、花弁、がく片が互いに交互になっていることが普通である。多くの花では、花弁どうしが同形で放射相称に並ぶが(サクラ、バラ、ナスなど)、花弁の間に互いに著しい形の相違ができ、左右相称に並ぶものもある。スミレの類や、エンドウなどのマメ科、オドリコソウなどのシソ科などはその例である(ちょう形花冠、しん形花冠)。

【がく】がく片はふつう緑色で、花弁より小形である。花弁に比べると互いに少なくとも基部ではゆがしていることが多く、著しい場合はがく筒をなしている。離弁花冠の場合でも、がく片が根もとまで離生しているものは少ない。また、雄しべや花弁が多数不定の場合にも、がく片は一定の少数のことが多い。がく片全体をまとめて〈がく〉と呼ぶ。

【花式図】上に述べた花の各要素が花芽の成長点のふくらしめとして形をなして現われてくる順序は、ふつう外側から、がく片、花弁、雄しべ、雌しべの順であるが、植物の種類によって、雌しべ・雄しべのほうに先に現われたり、孢子葉どうし、付属の花葉どうしの間でも、内外の順が逆になったりすることがある。同じ花葉、孢子葉は共通の輪の上に現われてきて、がく片輪、花弁輪、雄しべ輪、心皮輪が区別されることが普通であるが、双子葉植物では、キンボウゲ科などのように、多数の花葉がらせん状に配列する例も見られる。単子葉植物では花葉の数が不定、

多数で、らせん状に配列することはなく、大部分のものが3またはその倍数を示す。これに対し双子葉植物では、5あるいは4、およびこの倍数のものが多く。それぞれの花葉の配列の輪は一つのことと二つ以上のこともあり、同種の花葉の間でも、内外輪の要素は交互に並ぶ。しかし、かく片、花卉、雄しべを通じて、それぞれの輪の要素の数は必ずしも同数でなく、交互配列の関係は乱れることがある。一つの花の中で花葉の輪生とらせん配列とが混在することもあり、一般にらせん配列は輪生配列よりも原始的な型と考えられている。花卉などの輪生配列のうちに、2とおりの型があって、一つは隣りあった花葉どうしが、屋根がわらの重ね方のように、1枚の花葉の片側は隣のものの外側に、他の側は隣のものの内側になる並び方で、〈覆瓦(ふくが)状〉と呼ばれ、いま一つは、両開きのとびらが閉じているときのように、隣りあった花葉の縁と縁とが相接する並び方で、〈鋸合(じょうごう)状〉と呼ばれる。覆瓦状のほうは、らせん配列に近く、原始的と考えられている。花葉が通常葉の変形したものであるというゲーテの変態説以来の考え方からすると、当然、花托上でのその配列が、茎の上での葉序と同じ並び方で一貫していることが期待される。しかし、実際そのような花葉の配列が行われていることはむしろまれで、多くの場合花葉の形質が通常葉から強く変形を受けているように、茎の上の葉序の配列様式は、そのまま花の部分に連続的に持ち込まれてはいない。花葉の配列は、莖葉からの急激な一見全く不連続な変化を示す。花葉の間でも互いに移り変わることが見られ、不規則と見える数の増加や、退化やゆ合による減数が起こることもある。また、花卉と雄しべの間には、形態の連続的な移行が起こること(たとえばスイレン)もあり、両者の中間の形をさまざまな程度に示す花葉が見られる。花の要素の配列様式を模式的に平面図に表わしたものを〈花式図〉という。これでは、それぞれの花葉の形態や立体的な関係はわからないが、かなり大きなまとまった植物群で共通あるいは似通った花式図が得られて、花の構造を比較、解析するのに便利である。また、花の各要素を一定の符号で表わし、それぞれの数を書きそえて示したものを〈花式〉という。

【花の型の分類】植物の分類系は、人為分類といえども、ほとんどその大綱からいって、花の形態に基礎をおいている。したがって形態的に花の型を細分すると、分類系と並行するか、ないしはほぼそれを再現したものに近くなる。分類系と無関係に花の型を体系だてる試みがいろいろ行われているが、その一つに、花粉媒介者すなわち種々のこん虫やハチドリなどの小形の鳥などと花との関係から花の型を分類した場合がある。いわば、人間の代わりにこれらの小動物が花を分類したかどうかという点である。最初は、風媒花、水媒花などと対立して区別された虫媒花、鳥媒花といった素朴な概念から出発して、花粉媒介者が花を訪れることによって引き起す花の各部分の形態的均衡の変化や、機能の発達や、それに伴う色彩の変化

を手がかりとして、さらに細かく、同じこん虫による媒介を受けるものの間にも、たとえば、ハチによるものとハエによるものとは明確な差異があることがわかってきた。共通の型は必ずしも分類群とは一致せず、マメ科のある種とシソ科のある種の花に相似が見られることもある。デルピノ F. Delpino は、たとえば、それぞれハチ-, 小ハチ-, ハエ-, 小ハエ-, アオバエ-, 甲虫-, チョウ-, ガ-媒介花などを分けている。ミュラー H. Müller は、こん虫が花粉そのものを目的として訪れる場合と、ミツを目的とする場合とを区別した。その後、キルヒナー Kirchner, ヴェルト E. Werth, トロル W. Troll, クグラー H. Kugler その他の研究者によって、以上の要因にさらに花自体の形質、ミツ腺の型、花冠の相称関係の変形その他を考慮に入れた、さらに複雑な体系が提唱されている。むずかしい形質であるが、香気ないし臭気や、雌しべ雄しべの特定部位の運動なども重要な要素として取り上げられている。この方面の研究はこん虫など小動物の行動心理学が発達するに伴ってさらに進展すると思われる。

【花序】花は栄養枝である茎の上に1個ずつ着くこともあるが、多くの植物では、多数の花が一定の配列様式で1ヵ所に集まって、花枝の上に着く。〈花枝〉とは、通常葉を着けず、花のみ、ないしは花と包葉とを着ける枝をいう。花の配列様式は植物によって特徴があり、〈花序〉と呼ばれるが、ふつうこの言葉は花の集まった部分、すなわち花枝と同じ意味に使われている。葉序は葉の並び方についてだけ注目するが、花序では花枝の分枝のしかたが相当重要視される。花序を大別して、花枝の主軸が頂端で早く成長をやめて、側枝が順に出てきて、花は上方から下方に向かって、あるいは中心から外側に向かって遠心の開いていく〈有限花序〉と、花枝の主軸は長期にわたって成長を続け、側枝は下方から順に上方に向かって分枝し、花も下方から上方に、あるいは外側から求心的に中心に向かって開いていく〈無限花序〉とに分ける。有限花序はさらに〈集散(または集繖(さん))花序〉〈互散花序〉(あるいは扇形集散花序)〈巻散花序〉(あるいはかま(鎌)形集散花序)〈サソリ状集散花序〉〈カタツムリ状集散花序〉などがある。集散花序には、側枝が1節から2本出る〈岐散花序〉(あるいは二枝集散花序)と、1節から多数の側枝を出す〈多枝集散花序〉とがあり、上記の互散、巻散、カタツムリ状集散花序などは、単枝集散花序のいろいろの変形と見ることもできる。無限花序には〈繖状花序〉〈穂状花序〉〈散形花序〉〈頭状花序〉などが区別され、穂状花序の特殊なものに、サトイモやテンナンショウの〈肉穂花序〉や、ハンノキやシラカンバの〈尾状花序〉などがある。繖状花序の側枝が下方ほど順に長く伸びて、花がほとんど一平面上にそろって開く花序を〈散房花序〉という。主軸の頂端が成長をやめて花をつけ、見かけ上は散房花序に見える場合もあるが、これは有限花序の1種である。また花序全体の形から名づけた花序の呼び名には、しばしばまぎらわしいものがある。〈円錐

花序〉なども厳密には定義しにくい。上に述べた花序が基本になって、これらがさまざまな組合せをつくって、さらに高次のまとまった花序をなすことがあり、これを〈複合花序〉という。複合花序の大まかな分枝と、その中の部分的な花枝の分枝とが同じ型である場合は〈同型複合花序〉といい、〈複散形花序〉(セリ科植物の多くの種類)〈複繖状花序〉などがある。全体の分枝と部分の分枝が異なる型である場合を〈異型複合花序〉といい、〈頭状岐散花序〉、〈穂状繖状花序〉(イネ科の多くの種類)などがある。花枝の部分では分枝が密に起り、通常葉を欠いて、代わりに包葉や鱗片葉がさまざまな変形する。ふつうは小形で目だたないものが多いが、ときには、かえって大形になり著しい色彩をもつ場合もある(ポインセチアなど)。まれな場合としては、アブラナ科の大部分の種類のように、花以外には包葉なども全くなくなることもある。花序には特定の植物群にかぎって見られるひじょうに特殊な花序もある。タカトウダイ属の〈わん(碗)状花序〉などはその例である。雌花と雄花は、雌雄同株の場合でも別々に花序をつくることもあるが、1ヵ所に集まって、1個の花と見えるような花序をつくることもある。実際、なほはだしく退化して、それぞれ雄しべだけ、雌しべだけになったような簡単な花の集りを、花序と見るか花と見るかを決めることは、たいへん困難な場合がある。上にあげたタカトウダイのわん状花序をリンネは花とみなしたが、以来花か花序かの論争が続けられて、現在では花序であるということに一応落ち着いている。裸子植物でも、同じような例が多い。

【花の大きさなど】花の大きさには、ずいぶんと変化があるが、最も大きな花をもつ植物として有名なのは、熱帯地方マライ半島、スマトラなどに産するラフレシアであろう。葉を全く欠いて、植物体の全勢力を花に注ぎ込んだと思われるような巨大な花を開くが(直径1m前後)、それに反して、寄生植物の例にもれず栄養体は貧弱である。毒々しいほど強烈な色彩をもち、一種異様な臭気を放つ。逆に最も小さな花をもつ植物は、ミジンコウキクサである。これは植物体もきわめて小さく、れっきとした単子葉植物ウキクサ科の1種でありながら、体長0.5~0.6mm、幅0.4~0.5mmの楕円状小舟形をしており、水面に浮かんだとき、その上面から径0.1mmくらいの小孔が開いている。花はこの中の空洞の底面から出ている。形態も極端に退化したもので、1本の雌しべと1本の雄しべが並んでいるだけである。おそらく、1個の雌花と1個の雄花であろう。

シダ植物の孢子葉は、花とよんでよきような場合でも、すべて孢子を出してしまうと役目が終る。大孢子も小孢子も、母体外で発芽・発育するので、孢子葉との関係は切れる。種子植物の花は、大孢子葉(心皮)の上に形成される大孢子嚢(胚珠)の中で大孢子(胚嚢細胞)を発芽させ、さらに小孢子(花粉)の発芽、胚嚢形成、受精を行わせる役目を果たさなければならない。花の中で、花粉管および胚嚢という配偶体の世代、核相でいうと単相世代が経過するだけでなく、次の世代

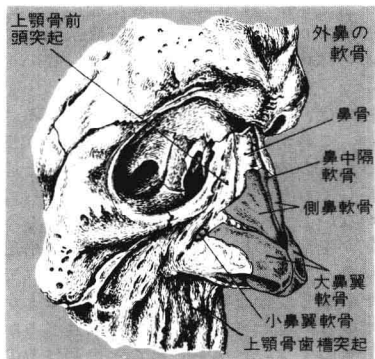
の幼植物体である種子が形成されるのである。シダ植物と種子植物との中間的な植物とみなされている化石植物のシダ種子植物は、シダ状の胞子葉の上に種子を形成している。これがもしほんとうならば、シダ種子植物の生殖器官こそは、花の系統発生のう えできわめて興味ある対象であろう。→花粉 →花式図 →花序
→子房 →胚囊 →種子 →ラフレシア

(古沢 潔夫)

はな 花 芸人に祝儀として与える金品のこと。纏頭（かぶき）にも書く。もと人に物を贈るのに花枝につけた故事にもとづき、能役者、歌舞伎（かぶき）役者などに当座の賞として小袖（こそで）などを贈る場合にこれをまねるようになった。後には花の枝を略したが、花の名称は残り、転じて祝儀の意味に用いられるようになった。纏頭（かぶき）は殿上人が相撲節会（すまいのせえ）のさい、祝儀として勝力士の首に着物を巻きつけたという故事にもとづく。また遊里では遊女の揚代を花代といい、さらに花代とは別に、妓（き）楼や若い者に対する祝儀の意味に花の語が用いられた。与えられた花に対し、吉原では若い者は返し（がへし）の食物を出すのが、遣手（やりて）は、返しをしないのが慣例であった。さらに遊女に対しても、2～3回目には揚代に応じて祝儀として床花（とこばな）を出すことになっていた。なお、芸妓の揚代のことを東京では玉代（ぎょくだい）というが、関西ではおもに花代という。

(原島 陽一)

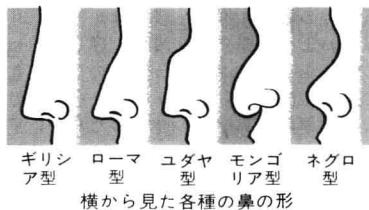
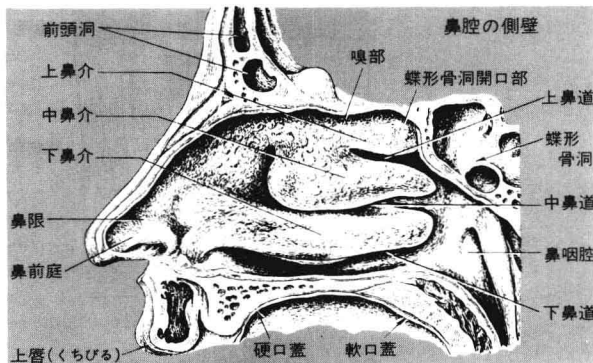
はな 鼻 【人間の鼻の構造】〔外鼻〕外から見た鼻すなわち外鼻は顔面の中央にある三角形の高まりで、その基質は下の図のように骨(上側は鼻骨、外側は上顎(じょうがく)骨前頭突起、下側は上顎骨歯槽(しそく)突起)とその上の鼻軟骨とからなる。外形は上方の鼻根からしだいに高まって鼻梁(俗に くはなさき)という)にいたるが、その間の峰を鼻梁(びりょう)あるいは鼻背(俗に くはなすじ)という)といい、その両側斜面を鼻屋という。外鼻孔を外側から囲む部分を鼻翼(俗に くばな)という)といい、ここはある種の表情をあらわすときや呼吸困難のときなどによく動く。両鼻孔は鼻橋によって左右に分れている。鼻の形は個人的にも人種的にも著しい差異がある。すなわち鼻梁がまっすぐであるか、なかだかであるか、へこんでいるかによって、直鼻、凸鼻、凹鼻に分けられるが、さらに凸鼻には鷲鼻(わしばな)、鉤鼻(かぎばな)などがあり、さらに凹鼻の極端なものとして鞍鼻(あんびーその項参照)がある。ま



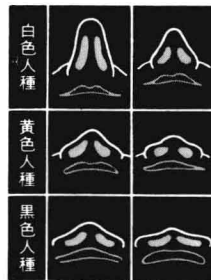
た人種的にもギリシア型、ローマ型、ユダヤ型、モンゴリア型、ネグロ型などと呼ばれるように、それぞれ特徴をもっている(右上図下)。鼻孔の形も人種によって差異がある。一般に白色人種の鼻は高くて幅が狭く、鼻孔は前後の方向に細長い。黄色人種の鼻はそれより低くて鼻孔は割合に円形に近い。黒色人種の鼻はいっそう低くて幅は広く、鼻孔は横に長い形をしている(右中図)。なお鼻幅の鼻高に対する百分比を〈鼻指数〉(その項参照)といって、鼻の形状の分類の資料に用いられる。

(鼻腔) 前方は前鼻孔で外界に開き、後方は後鼻孔により鼻咽腔(びいんこう)に開いている1対のへやで、鼻中隔によって左右に隔てられている。前鼻孔から少し内部で鼻限と称する鼻翼内面の高まりによって、鼻前庭と固有鼻腔とに分れるが、前者すなわち外鼻孔から入ったばかりの部分は、皮膚の続きでおおわれ〈鼻毛〉がはえており、後者すなわちその奥のかなり広まったへやは、粘膜におおわれている。鼻中隔は比較的うすく平たい板で後方は骨(鋤(じょ)骨、篩(し)骨水平板)、前方は軟骨(方形軟骨)によってつくられ、その表面は多少は平らであるが、ときには多少とも湾曲していることがある。鼻腔の外側壁には上、中、下の鼻介(鼻甲介ともいう)が前後に走る隆起となって突き出し、その側壁にそれぞれみぞ状をなす上、中、下の鼻道をつくっている。これらの鼻介は薄い骨板が血管に富む厚い海綿組織の粘膜におおわれたもので、鼻腔に入った吸気はこの表面を通るときに適当な温度と湿度とを与えられるわけである。鼻介と鼻中隔の間の空間を総鼻道といい、その上方の部分特に嗅(きゅう)裂(きゅうれつ)といって、この部分の粘膜すなわち嗅部は嗅覚作用に関係がある場所である(右上図)。

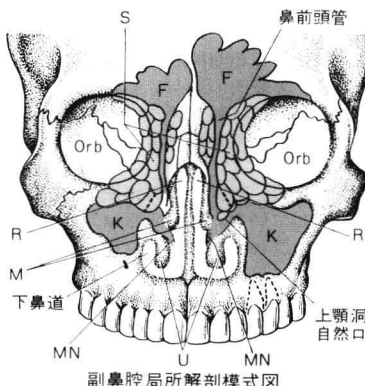
〔副鼻腔〕副鼻腔は頭蓋(とうがい)骨内にある左右有対の空気の入っているいくつかの洞(どう)で、その内面はコハク色をした紙状の薄い粘膜(纖毛上皮細胞)におおわれ、それぞれの洞は狭い出口によって上記の鼻腔と交通している。その生理作用については種々の説があるが、はっきりしていない。ここが細菌の感染などによって炎症を起すと副鼻腔炎(蓄膿(ちくのう)症)が起る。これらの洞は、その存在する場所の骨の名にしたがって、前頭洞、上顎洞、篩骨洞、蝶形(ちょうけい)骨洞に区別されるが、そのうち篩骨洞は一つの洞というよりはむしろ多数の小さなへやの集りからできあがっていて、これらのへやを前および後篩骨洞群に分けている(右下図)。また臨床医学上分けらすべての副鼻腔を前および後副鼻腔群に区別し、前頭洞、上顎洞、前篩骨洞は前者に、後篩骨洞、蝶形骨洞は後者に属させることもある。各洞の大きさ、位置には個人差が多い。以下に各洞について簡単に述べる。(1)上顎洞 目のすぐ下で上顎骨内にある空洞で、副鼻腔中最も大きく、鼻腔とは中鼻道の中央あたりで小さい孔(自然孔)で交通している。周囲との関係を見ると、天蓋は眼窩(がんか)底、底部は上顎骨歯槽突起、中央側は鼻腔側壁、前側は上顎骨体で囲まれている。人間が生まれたときにはエンドウ大の空



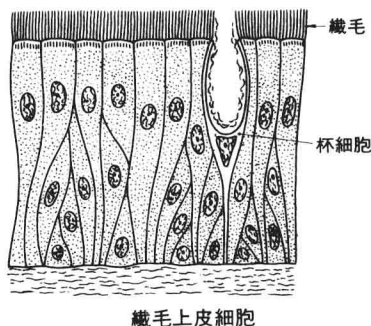
洞にすぎないが、成長とともにしだいに大きさを増して、15～17歳には完成する。その容積は男女で差はあるがおよそ十数 cm^3 である。(2) 前頭洞 眉間(みけん)の両側で目の上方にある骨中の空洞で、洞の底は眼窩上壁、天蓋は頭蓋腔前壁に接し、中鼻道前上部で鼻腔へ開口する。その大きさには個人差がはなはだしく、新生児には存在しないが16～17歳で完成する。(3) 篩骨洞 左右の目のおよそ中間で前後に並んでいて、洞の外方は眼窩と紙状板で、上方は前頭蓋腔と篩板によって境され、左右の篩骨洞は篩骨水平板で境される。前篩骨洞は中鼻道で、後篩骨洞は上鼻道でそれぞれ鼻腔に開口する。この洞は新生児でもある程度発達しているものであり、新生児急性副鼻腔炎と呼ばれ、鼻汁のほか高熱や眼症状などの激しい症状を呈する副鼻腔炎は、主としてここが侵されるのである。(4) 蝶形骨洞 頭のおよそ中心部に位する蝶形骨体部中にある長方形の空洞で、蝶竇陥凹(上鼻介よりさらに上で鼻腔の後上方天蓋に近い場所)に開口する。この上壁は頭蓋内にある脳下垂体、視神経および視神経交差と接しており、側壁は中頭蓋窩の壁をなし、海綿状静脈洞、内頸(ないけい)動脈などに接しているので、この洞の炎症が上記のような周囲組織にひろがって海綿静脈洞血栓(せん)、球後視神経炎、頭蓋底脳膜炎のような重篤な合併症を起すことがある。新生児では、蝶形骨洞は小さな陥凹にすぎないが、4ヵ月ころから発



人種による鼻の形の差異
(下から見る)



K. 上顎洞 F. 前頭洞
S. 篩骨洞群 R. 嗅裂
U. 下鼻介 M. 中鼻介
MN. 中鼻道 Orb. 眼
窩(蝶形骨洞の所在に
ついては右上図上参照)



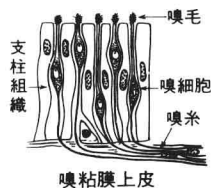
纖毛上皮細胞

達しはじめて16歳ころに完成する。

〔鼻腔の粘膜〕鼻腔粘膜のなかでも、中鼻介および下鼻介の粘膜は肥厚してしばしば数mmの厚さであるが、その他の部位では薄く、1mm以下である。この鼻介粘膜の肥厚は海綿組織の発達のためで、病めの場合には正常粘膜の数倍に達することがまれでない。鼻粘膜は、生理学および組織学的に呼吸部と嗅部に分けられる。(1)呼吸部 鼻腔の大部分を占め、桃色に見える粘膜でおおわれている。粘膜表面は纖毛上皮細胞(上の図)におおわれ、その間に杯(さかずき)細胞があり、また上皮組織には多数の粘膜腺(鼻腺)があり、これから分泌される粘液によって鼻粘膜をうるおしている。鼻腺は特に鼻介に豊富である。鼻介粘膜、特に中・下鼻介粘膜では、静脈が網状に密集して静脈叢(そう)を形成し、海綿体と呼ばれる鼻介特有の組織をなしている。これは気候の変化などの種々の刺激によって急速に拡大し、あるいは収縮して粘膜の温度や分泌を外界に順応させるのに役だっている。(2)嗅部 鼻腔の上方の部分、すなわち上鼻介およびこれに対する鼻中隔の上部で、嗅覚に欠くことのできない場所であり、ここは色素に富んでいて、肉眼的にはやや黄色みがかった。この上皮中には支柱細胞にはさまって多数の嗅細胞があるが、これはその表面に短い毛(嗅毛)を備え、その細胞体は結合組織の中に細長く伸び、嗅糸(嗅神経)となって鼻腔の天蓋にある篩板の孔を通して頭蓋腔に入り、大脳半球の前頭葉下面に接する嗅球に達する(左図)。

〔鼻の神経〕嗅神経は上述のようであるが、知覚神経は三叉(さんき)神経の第1枝(眼神経)と第2枝(上顎神経)からなっている。すなわち外鼻、鼻中隔前部および鼻腔側壁前部を支配する前篩骨神経と、蝶形骨洞、後篩骨洞および鼻腔後上部に分布する後篩骨神経とは、ともに前者からの分枝であり、後者からの分枝は眼窩下神経となって歯に分布するとともに上顎洞および鼻底に分布している。交感神経は内頸動脈周囲神経叢から翼口蓋神経節を経て鼻腔内に分布しており、アドレナリン消息子試験が陽性に出るのは、鼻腔内自律神経の緊張異常によるものと思われる。

〔鼻の血管〕動脈は内外両頸動脈の分枝が分布している。外頸動脈は顔面動脈および顎動脈に分れ、前者は鼻中隔前部および鼻翼に分布し、後者は上歯槽動脈および眼窩下動脈を経て上顎洞に、また翼状口蓋動脈によって鼻腔にひろく分布する。内頸動脈は眼動脈を経て前篩骨動脈(鼻腔側壁の前上部および鼻中隔前上部



に分布)、後篩骨動脈(篩骨および鼻腔後上部に分布)、内側前頭動脈(前頭洞に分布)に分岐する。

〔人間の鼻腔の機能〕鼻腔は呼吸道としての役割をなすほか、次の諸機能がある。すなわち嗅覚機能、吸気の加温、加湿およびろ過、空気中から抑留したほこりや細菌をとり除く機能および構音機能である。〔嗅覚機能〕人間の嗅覚は他のほ乳動物に比べてはなはだ劣るとはいえ、その閾値(いきち)はひじょうに小さく、たとえばショウノウは0.005mg/l、ハッカ脳は0.0000005mg/lの濃度のものを感じることができ。この感覚を受け取るのは、鼻腔の嗅部にある嗅神経の末端器すなわち嗅細胞で、臭気のある物体から飛散する微小体すなわち嗅素が吸気とともに鼻腔内に入り、これを刺激して嗅覚を生ずる。無嗅覚または嗅覚減退は鼻粘膜の腫(しゅ)張などによって嗅素が嗅部に達しないとき(呼吸性無嗅覚)、嗅神経末梢(まっしょう)の侵されたとき(真正無嗅覚)、中枢神経の一時的異常(官能性無嗅覚)などによって生ずる。

〔呼吸機能〕前鼻孔から入った吸気は直線的に後鼻孔に達するものではなく、鼻腔天蓋に向かって上昇したのち、後下方に弧を描いて後鼻孔に達する。主流は鼻中隔に近く嗅裂を通り、一部のみが鼻道の奥に入るにすぎない。吸気はその間に鼻毛、粘膜をおおう粘液膜によって、その中に混ざるほこりや細菌を抑留され、また血管の豊かな海綿組織によって適当な温度と湿度を与えられて喉頭(こうとう)、気管、気管支、肺などの深部呼吸道へ送られる。すなわち室温25℃の吸気は鼻呼吸によって鼻咽腔では37℃に達し、相対湿度35%の吸気は鼻咽腔では79%に高められる。また除じん能は52~80%を示すが、これには粘膜表面が陽電荷を帯びていることがいっそうほこりを吸着するのにあずかって力あるものといわれており、このようにして粘液膜に抑留されたほこりや細菌は次に述べる纖毛機能によって咽頭に排出され、胃に嚥下(えんげ)されて殺菌される。このように鼻腔ではかなりの空気浄化および加温、加湿作用が行われるので、鼻がつまってしまう呼吸しなければならぬ場合や、萎縮性鼻炎のように吸気に対してこれらの機能がなくなった場合には咽頭、喉頭、気管などが乾燥したり、炎症が起りやすくなる。呼吸の場合も、鼻腔内の気流はほとんど同様な経路を逆方向にとるが、この場合には大きな渦流が生じ、空気は鼻道の深部にまで入る。副鼻腔開口部はこのようにして湿度、温度に富み、比較的清浄な呼吸にのみさらされているわけである。

〔纖毛機能〕嗅部を除く大部分の鼻粘膜は纖毛をもった多列円柱上皮でおおわれている。上皮の表面には薄い粘液膜がかぶっていて、吸気中のほこりや細菌を付着したこの粘液膜は、纖毛の運動によって徐々に咽頭へ向かって運ばれ排除される。その機能は鼻腔深部で盛んであるが、前部の部位ではほとんど見られない。なお副鼻腔の中も纖毛上皮細胞におおわれ、副鼻腔中へ入ったほこりや細菌の付着した粘液膜は洞の自然孔へ向かって運ばれ、鼻腔内へ排出される。纖毛は一定の方向に活発な運動をくり返しているが、

その振動数は人間では1分間約250回で、これによって粘液膜の流動する速度は部位によって異なり、鼻腔では1分間3~6mmで、後方に流れて中鼻道および下鼻道に至り、ここで速度を増して咽頭に向かう。副鼻腔、たとえば上顎洞の洞底部では、緩慢で1分間2~3mmであるが、自然孔に近づくにしたがって速度を増し、自然孔付近ではその数倍の速度に達する。

〔構音機能〕鼻腔は口腔、咽頭などとともに音声に対して共鳴腔の作用をもっている。したがってこれに異常があれば、音声の響きが変わっていわゆる「くはなごえ」になる。

〔人間のおもな鼻疾患〕いわゆる蓄膿症、鼻カタルをはじめ、鼻中隔湾曲症、鼻ジフテリア、萎縮性鼻炎、肥厚性鼻炎、鼻茸(はなたけ)などをあげることができるが、これらについてはそれぞれその項目を参照されたい。

〔動物の嗅覚〕〔魚の嗅器〕動物は進化するためにしがい周囲のものを敏感に知覚することが必要になったが、いろいろの感覚のなかでも嗅覚はひじょうに重要なものである。特に水生動物においては視覚はその働きが比較的短距離にしか及ばず、特に深い所では光の不足のためにあまり役だたず、また聴覚は音源の識別が困難であって、えきを知るのに役だたない。これらに比べて嗅覚はそれによって周囲の水質、河川の近接、えきの所在また仲間の魚たちの近くにいることや、それが異性か同性かをあも知ることができる。魚の嗅細胞は陸生動物と違い、口腔などと孤立して存在する頭部の陥凹に複雑な皺壁(しゅうへき)をなして集まっており、これが水流に混じったにおいの刺激に直接にさらされ嗅覚を生ずるものである。魚が嗅素を含んだ水を嗅部へ送りこむのにはいろいろの方法がとられている。すなわちその鼻入口に並べられた纖毛を用いるもの、また前進運動を利用して流れる水を鼻孔の後にあふ弁でそちらへそらすもの、呼吸のために吸い込む水の流れを利用するもの、副呼吸囊の助けによるもの、触角を用いるものなどである。

〔陸生動物の嗅器〕嗅細胞は高等動物の進化した鼻においても、本質的には上述の魚の場合と同一である。すなわち両極性の細胞で、その表面にひじょうに短い毛が上皮の中から突出して直接に外気中の嗅素の刺激にさらされ、他端は結合組織内に細長く伸び、合して嗅神経となり、大脳半球の前頭葉下面に接する嗅球に達する。水生動物では嗅細胞が嗅素を含んだ水にふれて嗅覚を得るのであるが、陸生動物では、嗅素が嗅粘膜にふれ、これを感じ受けるためには嗅域を湿润にする必要があり、このために鼻腔呼吸部粘膜にある杯細胞や鼻腺、および嗅部粘膜のボーマン腺からの分泌液が役だつ。陸生動物では、嗅素を含んだ空気を呼吸するさい、これが鼻腔を通り嗅粘膜に至り知覚されるので、後鼻孔は咽頭および口と連絡しており、魚の嗅器のように孤立していない。多くの動物では口の付近から空気が嗅粘膜のほうへ運ばれるような構造になっていて、これによって口に入れて摂取する食物を味わい、選択することができる。たとえばウシが牧草は食べるが好ましくない雑草をとることを避けるの

は、このようにして得られる嗅覚を用いているのである。人間では先に述べたように吸気は鼻腔天蓋に向かい曲線を描いて上昇するが、この部に嗅細胞が位置して嗅覚を得る。なお、においを最もよく感受しうるためには、口を通してでなく鼻を通してのみ呼吸する必要がある、この目的のため食肉類などの嗅覚の鋭い動物では、喉頭蓋の位置が後鼻孔と喉頭とを直結し、口から空気の入るのを防ぐようになっている。嗅覚の比較的乏しい人間やサルでは喉頭蓋と軟口蓋とは隔たっている为上のような働きをもっていない。

鼻腔内部の構造も嗅覚に対して大いに関係がある。鼻腔壁から突き出ている鼻介は鼻粘膜の面積を著しく増大しているが、そのうち前方に近いものを上顎鼻介、後方のものを篩骨鼻介という(人間では鼻腔が短く、両者の関係は上下となるので前者が下鼻介、後者が中および上鼻介に相当する)。上顎鼻介は血管に富み粘液分泌のさかんな杯細胞や鼻腺のある繊毛上皮におおわれ、吸気に温度や湿度を与える。前に述べたように嗅覚には湿度の供給が欠くことのできないものであり、また絶対湿度は温度とともに上昇するものであるから、温度と湿度を上顎鼻介から与えられることは、嗅素を嗅部にもたらしに大いに役だつのである。上顎鼻介の形態は動物によってひじょうに種々である。篩骨鼻介は篩骨からの突起として生じ、動物の嗅覚の必要に応じて形の複雑さは種々であり、また嗅部の広がり方もさまざまである。すなわちヘビのような多くは虫類では嗅覚に乏しく鼻介は小さい。両生類はいくらか嗅覚があるが、ほ乳類には及ばない。鳥は主として視覚にたより、嗅器はひじょうに簡単に嗅覚には乏しい。ほ乳類のなかでも草食のものすなわち有袋類、有てい類、げっ歯類などでは広い嗅部をもち、嗅覚も鋭く、牧草のにおいを知り、また敵の体臭を感じて身の保存に役だっている。トラ、オオカミ、キツネなどの食肉類は最も嗅覚が鋭く、嗅部の広がりにはなほだしく広範囲である。すなわち篩骨鼻介はその形、うねりの複雑なためその表面を増し、嗅部はそれによって生じたくぼみや副鼻腔にまで入りこんでいる。サル類では嗅部の範囲は減少し、特に人間においては天蓋の近く篩骨鼻介のごく一部(上鼻介の付近)の小部分を占めるにすぎず、副鼻腔は単なる空洞として存在し、嗅覚とは関係をもたない。アザラシは嗅覚をもたず、篩骨鼻介ははなほ小さく、しかも気流からとぎされている。クジラ類は嗅部をもたず、したがって嗅覚がない。嗅覚の強い草食の動物および食肉類での篩骨鼻介の複雑さは、そのくぼみに吸い込まれた嗅素が呼吸とともに排出されることを妨げ、閾値以下においても数回の呼吸で嗅素が蓄積されることになり、嗅部の広がり大きいこととあいまって鋭い知覚を得ることができ。前頭洞や蝶形骨洞の中にまで嗅部の及ぶはこの機構を最もよく果たすものである。嗅覚の弱い人間などでは、このような構造はない。

(切替 一郎)

はな 鼻 芥川竜之介の小説。1916年(大正5)2月《新思潮》に発表、夏目漱

石の激賞をうけて、同年5月《新小説》に再掲され、芥川の文壇的処女作として注目的となった。出典を《今昔(こんじゃく)物語》巻二十八「池尾神珍内供鼻語第二十」と《宇治拾遺物語》巻二「鼻長き僧の事」に仰いでいる。ただし話の筋をかりたので、原作はこっけいを主とした説話だが、作者は心理解釈に重点をおき、その解釈にはゴーゴリの《鼻》から暗示を得ている。一見奇異でユーモラスであるが、根底には人生に対する懷疑や、心をひらいてあたたい愛情を授受しえない利己的な人間性に対する諦(てい)観が流れている。人生の満足も不満足も対世間的なもので、自己の内部に存在するのではない。人間は世間や世評に心をわずらわされ、自己を把握(はあく)することが弱いというのが、この作で彼のながめた人間性の本然の相であった。これは芥川の生涯をつらぬく人生観であり、その意味でも彼の代表作の一つとなった。

(吉田 精一)

はなあおい ♫たちあおい

はなあぶ [花蛇] *Eristalomyia tenax* 双翅(翅)目ショクガバエ科(ハナアブ科またはヒラタアブ科ともいう)に属するこん虫の1種。体長15mm内外。黒かっ色。腹部は黄かっ色または赤かっ色。各節に黒帯があり、第4節以下は黒色。幼虫は汚物または汚水中に住み、これを食べる。成熟したものは15mm内外。体長と等しいかまたはこれより長い細い尾状突起を有し、これで呼吸し、俗に「くおながうじ」と称される。成虫は花に集まるが、幼虫の生息する汚物にも集まるので、伝染病を媒介することがあり、衛生害虫とみなされるが、イエバエほど著しい害虫ではない。成虫で越冬し、休眠することなく、厳冬でも暖かい日には活動する。ほとんど全世界に広く分布する。→しよくがばえ

(黒沢 良彦)

はないおうめ 花井お梅 新内節曲名の通称。本名題《梅雨衣醉月情話(つゆごろもすいげつじょうわ)》。1887年(明治20)6月9日夜東京日本橋浜町河岸で、付近の待合酔月楼の女将花井お梅が同家の番頭八杉峰三郎を殺害した事件の読物、秋葉亭編で同年暮刊行された《花井お梅酔月奇聞》の1節を5世富士松加賀太夫が脚色、翌年3月発表した作品。くうきふし繋ぎ三筋の流れ……以下、お梅のくどきが聞かせどころで盛行。その後この《浜町河岸の段》が好評だったので、く自首の段》を発表したが、このほうは陰気すぎ感覚もあまりに古すぎてほとんど語られない。

(藤根 道雄)

はないかだ *Helwingia japonica* 葉のまん中に淡緑色の小さな花が咲くミズキ科の落葉低木。日本列島の特産で、山林内の日陰にはえる。葉は枝先に集まって互生し、卵形か楕円形で長さ5～12cm、きょ歯の先が毛状にとなる。花は5月ころ咲き、雌株と雄株の区別がある。雄花は数個集まって咲き、雌花は1～3個つき、後に径7mmばかりの果実が黒く熟し、食べられる。若葉も食べられる。

(奥山 春季)

はないかり *Halenia corniculata* 山地の陽地に自生するリンドウ科の越年草。高さ20～50cm、茎は4稜で、分枝する。葉は対生し、卵状または楕円形でふつう3脈があり、質は柔らかく、きょ歯はなく、下面の脈上と縁にかすかな突起がある。夏、葉腋(ようえき)に数個の花をつける。花冠は淡黄色で、4深裂し、裂片の基部に距があり、その状態が舟のいかりに似ているのでこの名がある。雄しべは4本ある。果実はさく(蒴)で、熟せば2片に裂け、多数の小形楕円形の種子を出す。北海道から九州、東アジア、東部ヨーロッパに分布する。

(佐竹 義輔)

はないずみ 花泉[町] 岩手県南端、西磐井(にしいわい)郡の町。1955年花泉、永井、涌津、油島、老松、日形の6村が合体、町制。56年金沢村を編入。人口18,416(1970調)。南部に夏川、中央部に金流川、東部に北上川が流れ、沿岸に耕地がひらけ、南は松島湾沈降地帯の湿田に接する。付近は稲作を中心にタバコの栽培、養蚕が行われ、近年河川改修と土地改良が進み、酪農も発展してきた。

(川本 忠平)

はないたくぞう 花井卓蔵 1868～1931 法学者。広島県三原市に士族立原四郎右衛門の四男として生まれ、1888年英吉利法律学校を卒業、90年代言人試験に及第して以来、1931年12月3日東京の自宅でガス中毒で急死するまで弁護士として活躍した。1898年以来、衆議院議員に当選すること7回、1915年には衆議院副議長になった。22年には貴族院議員に任ぜられた。法律家としての学識と雄弁とをもって、議会で法廷でも、その活動は光彩をはなち、死刑の廃止、陪審制度の採用など、つねに人権の伸長のために論陣を張った。1906年に法律取調委員、19年臨時法制審議会委員(のち副総裁)、29年法制審議会副総裁となり、刑法・刑事訴訟法の改正、陪審法の制定その他、立法の上にも大きな足跡を残している。シーメンス事件をはじめ取り扱った重要事件の弁論を集めた《訟廷論草》8編のほか、《刑法俗論》《自救権論》などの著書がある。

(団藤 重光)

パナイティオス Panaitios ca.180～ca.110 B. C. ストア派のギリシア哲



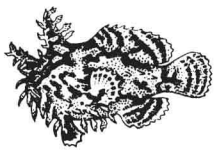
ハナアブ



花井卓蔵



ハナイカダ



ハナオコゼ

者。ロードス島に生まれ、長くローマで生活し、ローマ政界の名士を感化した。晩年アテナイの学校でその哲学を講じ、その地で没した。ストア哲学の本来の唯物論的一元論にプラトン主義を加味して観念論的二元論的な色彩を与え、また本来の厳格主義倫理説を緩和して、折衷的な中期ストア派の祖となった。著書はわずかの断片のみ残存する。(出 隆)

パナイとう パナイ島 Panay I. フィリピン中部、ヴィサヤ諸島にある島。イロイロ、カピス、アンティケ、アクランの4州からなる。長さ約152km、幅約120km、面積約11,500km²、人口2,350,000(1975推定)。北方はシブヤン海、南方はスル海、東方はヴィサヤ海に面する。島の骨格をなす山地は東西兩岸を南北方向に走る二つの褶(しゅう)曲山脈で、その間に沖積平野が開ける。東部は丘陵性、西部はだいたい脈状山地で、北東にパナイ川、南東にジャクル川が広大な三角州を形成している。乾季・雨季があり、水稻の生育に適する。米、サトウキビ、ココナツ、果実類、タバコを産する。山間地では馬が飼育され、銅が採掘される。人口は密で、とくに海岸地帯が高い。

(木村 宏)

はないばな *Bothriospermum tenellum* ムラサキ科の一年草または越年草。茎は基部からよく分枝し、高さ10~30cmになる。葉はさじ形または楕円形で互生し、葉面にしわと短い毛がある。花は春から秋にかけてつぎつぎに咲く。花は長さ10cm内外の穂状花序をなすが、包葉が大きく普通葉のように見えるので、葉腋(ようえき)から花が出ていているように見える。花冠は小形、青色、5裂している。北海道から九州にかけてふつうに産し、東アジアに分布する。(佐竹 義輔)

ハナウ Hanau 西ドイツ中西部、ヘッセン州のマイン川右岸にある工業都市。人口86,200(1977推定)。産業の活発なマイン下流域の東端にあり、石英・白金溶融、貴金属・装飾品、金剛石研摩、金属・機械・木材工業などの諸工場がある。州裁判所、記号学アカデミー、鉄道学校、市立劇場のほか、マリア教会(13~15世紀)、旧市庁(1537~52)、市城(17~18世紀)などの歴史的建築物がある。第二次世界大戦で70%が破壊された。

(横川 文雄)

はなうど *Heracleum moellendorffii* 白い小さな五弁花が、散形に集まって咲く高さ1mに達するセリ科の多年草。日本列島の山野にはえ、茎が太く、中空で全草に粗毛がある。3出羽状の大きな葉を互生し、小葉がさらに裂け、柄の基部が鞘になって茎を抱く。4~6月ころ開花し、倒卵形で著しい翼がある果実ができる。若葉は食べられる。漢方薬のビャクシ(白芷)の代用品として、かぜなどに用いられ、特に江戸時代には増上寺の境内にたくさんはえていたのでゾウジョウジビャクシ(増上寺白芷)と呼ばれた。

(奥山 春季)

はなお 鼻緒 下駄(げた)・草履(そうり)など鼻緒履物(はきもの)類の着用装置。前緒と横緒の2部からなり、前壺(まえつぼ)と両横の3点によって下駄・草履の台

部に取りつけられる。草履の鼻緒には台部の芯緒(しんお)をそのまま利用して前緒とするものや、芯緒に横緒を掛けたりするものがあるが、下駄の鼻緒は台部と別個の材料で作られ、前緒・横緒の先端をそれぞれ前壺・両横の孔(こう)に通して、台裏において結びとめた。これを鼻緒というのは、前緒をさして呼んだ鼻緒という部分名が、この装置全体を呼ぶ総名として拡大使用されたものである。現在でもこれをくはなおといわず、くおくよくくはなご などと呼んでいる地方がある。鼻緒の材料には、地方ではイネわら、麻、シュロ、竹皮、フジづる、ビロウなどが用いられたが、都市では巻緒などといって、麻の芯緒にビロード、獣皮、レザー、布などをかぶせたものが多く用いられている。→下駄 →草履

(宮本 馨太郎)

はなおか 花岡 秋田県北部、大館市花岡町、奥羽本線大館駅の北方4kmにある銅鉱山。日本最大の黒鉱鉱山で、10群余の鉱床群から銅、鉛、亜鉛、硫化鉄鉱、セッコウ、重晶石の鉱石を産する。1886年(明治19)に発見されて以来、かつては小坂鉱山の旧元山鉱に匹敵する堂屋敷鉱床で採掘され、堤沢では露天掘も行われた。地質は第三紀中新世の砂岩、レキ岩、ケツ岩、変朽安山岩、玄武岩流紋岩、流紋岩質凝灰角レキ岩、凝灰岩、泥岩、石英安山岩、粗粒玄武岩からなり黒鉱鉱床は流紋岩溶岩層の上位に、層状・塊状を呈して産し、黄銅鉱、方鉛鉱、セン亜鉛鉱、黄鉄鉱、重晶石、セッコウの鉱石鉱物を主とし、他の多数の鉱物を伴う。主要鉱物の組合せにより黒鉱、黄鉄、ケイ鉱、半黒鉄、セッコウなどの鉱石種に区分され、これらの組合せにより各鉱床が特徴づけられる。鉱山の南東部で1963年5月に大規模な新鉱床が発見された。東西600m、南北1,000mにわたり水田地域の地表下200~300mに分布するこの新鉱床は松峰鉱床と呼ばれ、埋蔵鉱量は約3,000万tという。1966年10月に開山式が行われ、3万t/月の鉱石が坑道式下向分層採鉱法で採掘され、傾斜28°、712mの斜坑と深さ435mの立坑などの設備により出鉱するが、近年地盤沈下が激しい。1978年現在の出鉱量は月産4.5万t、年間では松峰、深沢、餌釣(えづり)の現行3鉱床合計約80万tで花岡選鉱場で浮遊選鉱し、花岡~大館~小坂間の鉱山鉄道で運搬、小坂鉱山の自溶製練炉で製練する。同和鉱業の経営で花岡鉱業所と称する。なお、第二次世界大戦中日本に連行された中国人約4万の一部約900人が1944~45年花岡鉱山で強制労働に従事させられた。45年6月虐待に抗して蜂起したが、鎮圧されて約400人が殺された。〈花岡鉱山事件〉と呼ばれる。(関根 良弘・山田 洋)

はなおかせいしゅう 華岡青洲 1760~1835 外科医。紀州(和歌山県)の人。名は震、字(あさな)は伯行。1782年(天明2)京都に遊学し、吉益南涯について古医方の説を学び、また大和見立にしたがってオランダ外科学を修めた。85年故郷に帰って医業を開いた。古医方の基本をなす実物親試の精神を体得し、〈内外合一、活物窮理〉ということをもその信条とした。そののち苦心研究を重ね、麻沸湯と称す

一種の麻酔剤を発見して、1805年乳がん手術を敢行した。それから各種の外科手術を行うようになり、医名はますますあがり、全国各地からその医療を請うものが数多く集まり、一生を診療にさげした。またそのかわら多数の門弟を養成し、すぐれたいくたの外科学者を出した。19年、紀州藩の小普請医師となり、33年には奥医師格となった。

(大島 蘭三郎)

はなおこぜ *Pterophryne histrio* イザリウオ科の魚。静岡県静岡でモクノヨ(海藻に付いている魚の意)というように、流れているホンダワラなどによく付いている。高知県柏島ではアンコという。黄色の地にかつ色の班紋がある。イザリウオに似ているが、皮膚にとげがなく、なめらかである。第1背びれの3個のとげは異常の形をしており、はなればなれになっている。胸びれや腹びれは肉質で、一見手足のようである。全長20cm。本州中部以南、中国まで分布している。食用にはしない。(阿部 宗明)

はなかいどう ぐかいどう

はなかせ 鼻風邪 〈普通感冒〉(コモン・コールド)は、合併症を起さないかぎり全身症状は軽く、鼻の急性カタル性炎症が主症状である場合が多いので、俗にくはなかせと呼ばれている。鼻粘膜が赤くはれるが、一般に上気道粘膜カタルの部分症状として現われることが多い。日常最もありふれた病気で、初めに鼻内乾燥感、赤熱感があり、次いでくしゃみや現われ、水様鼻漏、鼻閉塞(へいそく)を訴えることは、ほとんどだれでもが体験していることである。鼻漏はしだいに粘液を混じて一部膿(のう)性を帯びるようになり、同時に発熱、頭痛、倦(けん)怠感などを訴える。原因はビールス感染によると考えられるが、2次的に他の病原菌の感染を伴って化膿性炎症に移行し、ときに副鼻腔炎、気管支炎などを起す。予後は良好で、ふつう1~4週間の経過で全治する。治療は普通感冒の場合に準ずるが、治り期には鼻洗、血管収縮剤の点鼻などを行う。合併症のそれぞれあるときは抗生物質、サルファ剤などを投与する。→感冒 (切替 一郎)

はなかたばみ *Oxalis bowiei* 南アフリカ原産のカタバミ科の多年草。葉は3個の小葉からなり、丸い倒卵形で先がくぼみ、短い柄がある。花は径2.5cmばかり、紅紫色の五弁花で、秋に花茎の頂に3~12個、散形に集まって咲く。江戸時代の末に輸入され、花が大きく美しいため〈花カタバミ〉の名がある。

(奥山 春季)

はなかみきり 鞘し(翅)目カミキリムシ科に属する甲虫のうち、ハナカミキリ亜科に属する種類の総称。他のカミキリムシ類に比べて、体の割合に頭部が大きく、複眼の後方が著しく張り出し、前胸が前方にせばまり、頭部の幅が前胸背の前縁より明らかに幅が広い。ヨーロッパから日本にいたる旧北区と北アメリカに多くの種類を産し、他のカミキリムシ類とは逆に熱帯には種類がきわめて少ない。日本には約100種類を産する。ハイイロ

華岡青洲



カミキリ *Rhagium inquisitor*, カラカネハナカミキリ *Gaurotes doris*, オオヒメハナカミキリ *Pidonida grallatrix*, アカハナカミキリ *Anoplodera rubra*, マルガタハナカミキリ *Judolia cometes*, ヤツボシハナカミキリ *Leptura arcuata*, ヨスジハナカミキリ *L. ochraceofasciata*, フタスジハナカミキリ *L. vicaria*, ニンフハナカミキリ *Strangalia nymphula*, キヌツヤカミキリ *Corennyss sericata*, オオホソコバナカミキリ (ニッコウホソコバナカミキリ) *Necydalis solida* などがその代表的な種類である。(黒沢 良彦)

ハナキン *Khanaqin* イラク東部, イランとの国境に近い小都市。人口144,085 (1970調)。バグダード〜テヘラン間の幹線道路が通り, バグダードからエルビルに通ずる鉄道の支線の終点をなす。小油田があり, 旧アングロ・イラニアン石油会社の子会社であったハナキン石油会社によって採油されていて, 製油所がある。(阪口 豊)

はなぐさびょう 花腐病 植物の病気。リンゴ, ミザクラ, アンズなどに出るが, 特にリンゴで恐れられている病気で, 青森で開花時に多雨の年, 不作を起す主因である。スクレロティニア・マリ *Sclerotinia mali* (子囊菌) の菌核から春になるとキノコのような子囊盤が出て, 展開したばかりのリンゴの若葉に感染し, 葉はかっ色に腐り, 花も枯れてしまう。病葉の上にはできる胞子は, さらに開花中の花の柱頭から侵入して幼果を侵す。病果の中には黒い菌核ができて冬を越すので, 防除には畑に落ちた幼果を処分し, 畑を乾燥に保ち, 5月上旬ごろ石灰をまいて胞子の飛散をおさえる。リンゴ発芽後に石灰イオウ合剤を数回散布し, 人工受粉をおこなうことなどがすすめられている。(明日山 秀文)

はなぐそ 鼻糞 鼻腔内の粘液またはそれにじんあい(塵埃)が混じって乾燥してできるもの。通常吸入されたじんあいは, 大部分が鼻腔内の粘液と混じって, 鼻粘膜上皮の繊毛運動によって, のどのほうへ送られるものであるが, 異常な環境とか鼻腔が乾燥した状態のときは「はなぐそ」は多くなる。萎縮性鼻炎, 鼻の梅毒, 結核, ジフテリアなどのさい, または鼻腔内手術の後は膿苔(のうたい), 痂皮(かひ), 凝血などからなる「はなぐそ」が生ずる。これらの場合には専門医の治療を必要とする。(切替 一郎)

はなご 花子 狂言の曲名。驚(きき)流では《坐禅》と称した。シテは花子を慕う男。花子という好きな女の宿から便りがとどいた男が, 夜とおし持仏堂で坐禅をすると妻をだまし, 太郎冠者を身代りにして坐禅袋(ふすま)を頭からかぶらせておいて, 花子のもとに急ぐ。それを夜中に見破った妻が太郎冠者と入れかわっていても知らぬ夫は, 夜明けに帰って, 妻を太郎冠者だと思いこんで, その前で昨夜の色模様を小歌まじりに事細かに話して聞かせるので, 妻が激怒する。長丁場を独演する上, むずかしい小歌が多く, その上つい昨夜の情事を物語るといふことにも演じにくさがあるので, 諸

流派ともに格別に難曲として重く取り扱っている。後に歌舞伎舞踊の《身替坐禅》を生んだ。(横道 万里雄)

はなごけ *Cladonia rangiferina* ハナゴケ科の地衣。本体は子器柄が密集まり径数cmあるいは10cmあまりの球塊状をなし, かわけば多少軟骨質であるが, 湿れば弾力に富み, さながら海綿のようである。各子器柄は細管状で中空, 多くの横枝を出し, 各枝はさらに細かく分岐する。化学反応としてカ性カリに黄色を呈し, ペンチジンには赤かっ色を呈し, 苦味がある。枝の先端に子器を生じ, 半球状, 黒かっ色で, 子囊中に楕円形で無色の囊胞子を8個ずつ生ずる。ほとんど全世界の高山, および寒帯地方の乾燥したツンドラの植物要素として普通に見られる。近縁のものにミヤマハナゴケ, ワラハナゴケなどがある。またクラドニア属 *Cladonia* には種類が多く, 約300種が知られている。(小林 義雄)

はなごさ 花菓産 ⇨花筵(はしろ)

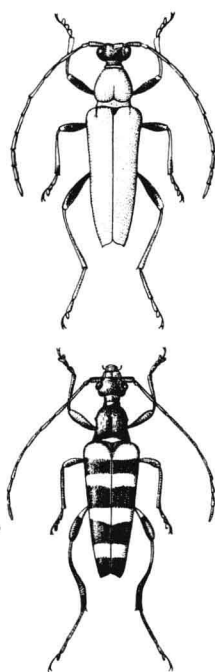
はなことば 花言葉 花には東洋でも西洋でも, 古くからさまざまな伝説やシンボルがある。西洋では, バラは美の標章, ユリは純潔, スミレは謙遜(けんそん), ヒナギクは世間知らずの無邪気さ, パンジーは思いを表わし, 同時にローレルは光栄を, カシは愛国心を象徴しているなど, さまざまなものであるが, 中世に, 騎士たちが愛人に花を贈って無言の意志や感情をつたえる風俗をつくったこと, キリスト教によって花に宗教的なシンボルが与えられたこと, 文学作品によって花の伝説やシンボルが伝わったことなどによって, 花言葉の風俗ができあがったように思われる。それに対し, フランスでは, 花言葉に「寓意の花束」bouquet allégorique という別名があって, その起原は東洋のセラム *selam* またはセラン *seran* で, 一つの花あるいはいくつかの花の意味を組み合わせてひとに贈り, それを受けたひとは同じように花の言葉で返事をする風習が伝わったといっている。セラムまたはセランはアラビア語のあいさつという意味だから, それがアラビア方面の風俗だったということがわかる。花言葉のなかで, ギリシア, ローマの伝説やキリスト教に関係した意味はだいたいヨーロッパ諸国に共通しているが, イギリスの花言葉とフランスのそれを比較してみると, 前者には故事来歴の意味が多く, 後者には実際に花をやりとりする時の情緒的な意味が多い。イギリス, フランスの花言葉の全体から, 若干の実例を示してみると, イギリスのリンゴの「誘惑」は, イヴが誘惑されて食べたエデンの園のリンゴを意味し, フランスの「最も美しい人」は, ギリシア神話でヘラ, アテナ, アフロディテの3女神の前に投げ出された黄金のリンゴを意味している。キョウチクトウは有毒なのでイギリスでは「危険, 注意」であるが, フランスでは「美と善良」を意味して, 深刻な意味に用いていない。タイマが死刑囚に使うなわにつくられるので, イギリスでは「運命」という意味があるが, これもフランスでは「有用」という意味に

なっている。ヒナギク, サンザシ, スズランなどの春の花には, 希望, 幸福の意味が与えられ, 秋の終りに咲くミカエルマス・デージー(シオンの類)やイヌサフラン(コルチカム)などには, 「過ぎ去った時を思う」「わが最上の日は過ぎた」というような意味が与えられている。花の色の中で, 紫のヒヤシンスはギリシア神話のヒュアキントス(アポロンに愛された美少年で, 誤って殺され, その血の中からこの花が生じたといわれる)にちなんで, 「悲しみ」を表わしているが, マツムシ草もその紫色の花が悲しんでいる寡婦にふさわしいというので, 「嘆きの寡婦」という名前がつけられ, 「私はすべてを失った」という花言葉になっている。とくに黄色には不吉な色という民俗があるので, バラ, キク, カーネーション, チューリップ, ユリなどの黄色い花には, なんらかの意味で不吉な寓意がある。(春山 行夫)

はなごよみ 花暦 植物の花期は種類によって異なるから, いろいろの植物を花期の順に書き並べれば, 花による暦, すなわち花暦ができる。サクラのようにすべての花が一斉に開いてすぐ散るものもあり, アサガオのように交代で開いて数週間の花期をもつものもあるので, 花暦をつくるときは咲きはじめとかまっ盛りとかの標準を定める。また花期は地域的にもかなり違うので, 花暦は地方によっても異なる。東京地方を例にして最盛期の花暦をつくってみると次のようになる(・印は咲きはじめのもの)。(1月)ツバキ, ウメ。(2月)ツバキ, ウメ, スイセン。(3月)タンポポ, ジンチョウゲ, ナタネ。(4月)ソメイヨシノ, ヤマザクラ, ヤマブキ。(5月)ボタン, フジ, キリ。(6月)ハナショウブ, タチアオイ, アジサイ。(7月)グラジオラス, ヤマユリ, ヒマワリ。(8月)マツバボタン, サルスベリ, キキョウ。(9月)ハギ, ススキ, ヒガンバナ。(10月)コスモス, リンドウ, キク。(11月)サザンカ, ビワ。(12月)ツバキ。(小倉 謙)

はなごよみはっしょうじん 花暦八笑人 ⇨八笑人

はなさかじい 花咲爺 巖谷小波の《日本昔噺》以来, 五大国民童話の一つとさえいわれるようになった花咲爺の話は, 分布から見ると, 青森県以南九州の中部までに限られている。そのうち, 福島県以北では雁(がん)取爺の話と併存している。南九州には花咲爺はなく, 雁取



上, アカハナカミキリ
下, ヨスジハナカミキリ



ハナゴケ

《花子》 1965年東京, 観世会館の舞台より(シテ三宅藤九郎)



爺だけがある。そして、内容のほうから見ると、日本の南北両端に残っている雁取爺の話のほうが古く、本格的な型を保っている。南部地方の雁取爺の話为例にとってみると、昔、上田お爺(じい)と下田お爺がいて、下流の下田お爺の築(やな)に魚がどっさりかかるのをねたんだ上田お爺は、自分の築にかかった木の根っこを下流の築に投げこんだ。下田お爺がそれを持って帰って割ると、中から白い小犬が出てきた。犬は1杯食わせれば1杯だけ、2杯食わせれば2杯だけ大きくなり、爺様について山にシカ狩に行くようになる。この犬はシカ狩の名手だった。下の家でシカがとれるのをねたんだ上田お爺は、犬を借りていくが、犬がいうことを聞かないので殺してしまう。下田お爺は犬を埋めた所にいき、そこに生えた米のざくざく出る木を切ってくる。それも上の家で借りてきて、燃してしまったので、下田お爺はその灰をもらい、〈雁の目さ入れ〉といってまき、雁を落す。上田お爺はまねをして、〈爺の目さ入れ〉とまちがっていったまき、目に灰を入れて失敗した。花咲爺では、発端の犬をさずかる部分がない。爺様が犬をかわいがっていた、というところからはじまる。東北・北陸には、桃太郎の話の発端を借りたものがあり、流れてきた桃や香箱から犬が出、四国・九州には、竜宮童子の話のをはじめと同じく、竜宮からもってくる話がついているが、本来のものではない。犬に教えられて黄金を掘り、犬の墓の木で作った臼(うす)をつけば黄金が出、臼の灰で枯木に花を咲かせる新しい趣向は、雁取爺の話から派生し、貨幣崇拜と観念的美化の風潮の中で、しだいにそれにとってかわったのである。

(益田 勝実)

はなさきはんとう 花咲半島 ⇨根室
(ねむろ)半島

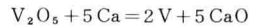
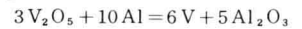
はなじ 鼻血 [原因] いろいろあるが、最も多いのは乾燥性前鼻炎という疾患である。これは鼻孔の入口がかわいてくさぶたができる病気で、鼻をほじる習慣によって始まることが多い。すなわち鼻をほじる人は指のつめで鼻中隔(いわゆる鼻の障子)の前端の一定の場所を常に刺激することになる。この鼻中隔

の前端をキーセルバツハKiesselbach部位というが、ここは最も鼻血の出やすい場所である。鼻をほじるとここに傷がつき、そのときは出血が起きなくても、そこに生じたかさぶたが朝の洗顔時やかぜ気味のときに脱落して急に鼻血が出る。鼻に打撃を受けて出る鼻血も、大部分はこのキーセルバツハ部位からの出血であって、この部位は軟骨からできているし、また顔から突出した部分の内側についている関係上打撃などによって損傷を受けやすいのである。鼻血は全身状態と関係があることも多い。精力のつく食物をとると鼻血が出るというのは、おそらく血圧が上昇するためかと思われるが、高血圧が鼻血の原因となることはよく知られている。また婦人には代償性鼻出血というのがある。月経のさいに鼻粘膜から出血するもので、毎月定期的である。全身病として最も恐ろしいものの一つに血液病がある。白血病、アグラノロチトゼ(無顆粒(かりゅう)細胞症)、また赤血球の病気で起ることもあり、遺伝的には血友病がある。局所だけの原因で起るものには、前述の乾燥性前鼻炎のほかに各種の腫瘍(しゅよう)がある。すなわち、がん腫、肉腫などである。老人でしきりに鼻血が出て、ことに片側の鼻がつまって通らないときは、上顎(がく)がんと疑う必要がある。がんのほかに、出血性鼻たけ、血腫腫(けつしゅ)鼻、鼻咽(いん)腔組織腫などがある。特に鼻咽腔組織腫は男の子にできるもので、出血性のため手術がむずかしく死亡する場合がある。

[治療] 特別な原因によって起ったものは、その原因を除かなければならないことはもちろんである。全身治療として最もたいせつなことは安静である。肉体的安静と同時に精神的安静が必要であって、単に鎮静剤を与えて休ませるだけで止血する場合が多い。頭の位置を低くすると頭部に充血してよくないから、就床時には半座の姿勢をとる。ただし血液がうしろからのどのほうへ回ったとき、これを飲んでしまうと、出血しているのがわからないためにたいへんなことになるばかりでなく、あとで嘔下(えんげ)した大量の血液をいちどに吐き出して、たちまち心臓が衰弱してしまうことがある。鼻の上から水囊(のう)で冷やすことはたいせつである。前にも述べたように鼻血は鼻の入口から出ている場合が多いから、そのように考えられるときは、鼻孔に消毒した脱脂綿をいっばいに堅くつめて、鼻翼の外から押していると止まることがある。鼻血が耳に入ると中耳炎を起すから鼻をかむことは禁物である。鼻血が止まらない場合は、早く医師の診療を受けないと貧血して危険になる。貧血を起しているかどうかを知るためには、まぶたを裏返してその色を見るとよい。最もよい止血法は輸血である。(堀口 申作)

バナジウム Vanadium 元素の一つ。バナジンともいう。元素記号V。周期表第V族の遷移元素の一つ。原子番号23。原子量50.9414±0.0003。同位元素:51存在比(99.76%), 50(0.24%), おもな放射性同位元素:48(β⁻崩壊56%, 電子捕獲44%, 半減期16.1日), 47(β⁺, 33分), 53(β⁻, 2.0分), 46(電子捕獲, 0.42秒),

50(電子捕獲, β⁻, 6×10¹⁵年), 52(β⁻, γ線放出, 3.76分), 54(β⁺, γ線放出, 55秒)。地殻存在度135重量ppm(第19位)の豊富な元素で地殻に広く分布している。おもな鉱石はバナジン石Ca₃(VO₄)₂Cl、カルノー石2K(UO₂)VO₄・3H₂O、バナジン雲母K₂H₄(Al,V)₆Si₈O₂₄など。鉄鉱中にも少量含まれ、ホヤなどの原素動物にも存在する。酸化物を融剤とともにアルミニウムやカルシウムで還元して製せられる。



鋼灰色の金属。融点1,717℃, 沸点3,000℃, 比重5.98(18℃), 結晶は体心立方格子。空気中では安定であるが、酸素中で熱すると燃焼する。炭素とともに強熱すると銀白色の炭化バナジウムVCとなり、窒素中で強熱すると灰色の窒化バナジウムVNとなる。ケイ素、ホウ素なども高温で化合してケイ化バナジウム(V₂SiおよびVS₂)、ホウ化バナジウムVBなどとなる。酸には侵されがたいが、フッ化水素酸、硝酸、過塩素酸、塩素酸、熱濃硫酸などには溶ける。アルカリ溶液には作用しないが、アルカリと溶融すると水溶性のバナジン酸塩になる。原子価は2, 3, 4, 5。金属は特殊鋼の原料となり、純粋な金属はX線管のターゲットとして用いられ、酸化物V₂O₅は硫酸製造その他の触媒としても用いられる。

(植田 竜太郎)

バナジウムこう バナジウム鋼 炭素鋼にバナジウムを添加して物理的・機械的性質を改善したもの。バナジウムを鋼に添加すると、その一部は地鉄中に固溶し、残りは炭化物V₄C₃(炭化バナジウム)となる。バナジウムは価格の関係もあって、クロム、マンガンなどは合金元素としてふつうに使用されないが、結晶粒度の微細化、焼戻軟化抵抗の強化、炭素、窒素との親和力が強いなどの点を利用して、とくに高合金工具鋼、耐熱鋼などには重要な合金元素である。また低炭素鋼に対するバナジウムの影響はニッケルに似て、じん性を害することなしに強度を増し、熱間強度も大で、また衝撃、曲げ疲労および摩耗に対する抵抗力が大であるから、クロム鋼またはクロムタンゲステン鋼などとともに高級構造用鋼として用いられる。

(藤田 利夫)

バナジウムしょくばい バナジウム触媒 炭化ケイ素、ケイ藻土、活性アルミナ、耐火粘土などの担体にバナジン酸アンモニウム液をつけ焼いて得られる五酸化バナジウムを主体とする触媒。若干の第3成分を加えたものもある。五酸化バナジウムは酸化反応、とくに空気、酸素などによる酸化にすぐれた触媒性能を有し、空気酸化による亜硫酸ガスから無水硫酸の製造、ナフタリンまたはキシレンから無水フタル酸、テレフタル酸の製造、ベンゼンから無水マレイン酸の製造などに使用される。

(桑田 勉)

はなじか *Cervus nippon taiouanus* カロク、タイワンジカともいう。冬毛でも体に白斑がある台湾産の美しいシカ。和名は「花ジカ」の意。体の大きさは本州産のホンシュウジカ *C. n. centralis* <



ハナシノブ

ハナジカ



らい。すなわち頭頸1.5m, 肩の高さ85cmくらいで、よく似ているが、角はやや短く50cmくらいで開きが強く、第1枝(眉枝(びし))は短く、体には顕著な白斑があり、冬毛でも消えない。また背の正中線には幅広く明確な黒線がある。台湾の原産といわれ、台湾では袋角をとるためによく飼育されるが、野生のものはほとんど知られていない。日本の動物園にはふつうに飼われ、伊豆大島では動物園から逃亡したものが野生化している。習性はふつうのシカと同じである。

(今泉 古典)

はなしせんりょう 話千両 古い昔話の中には、金を出して買った諺(ことわざ)の力で災難をのがれたという一群の話があり、全国に分布している。越後の話では、江戸に冬働みに出て金をためた男が、見知らぬおじいさんにすすめられて、話一つに大枚1両も出して買う。〈きれいな夜具に寝るな〉という話、〈大木より小木〉という話、〈ならぬ勘忍、するが勘忍〉を買う。その後、山の中の一軒家に泊まるが、第1の話を思い出し、絹の夜具をあやしんで部屋の間で寝て、山賊の難をのがれる。道中の雨宿りでもいったん入った大樹の下を立ち去り、雷の難をのがれた。わが家に帰って、戸口から男がのぞくと、妻が情夫と寝ている。怒ってたたき殺そうとしてくならぬ勘忍、するが勘忍〉を思い出し、戸をたく。それは、男気のない留守の無用心を恐れて、妻が作った人形だったのである。豊後では話を1,000両で買ったとし、磐城地方では2両で一つ、もう一つを5両出して買った、ということになっており、買った諺も地方によってちがいがあある。老人たちの語る昔話は、封建社会では教育的な役割をもっていたが、話千両型の昔話は、祖先たちの処世体験の結晶である諺を価値づけ、より深く印象づけようとする話手たちのくふうから語り出されたものである。諺は昔話や伝承とならぶ重要な民間伝承の一つであり、今でも、農村の老人たちの日常会話の中には、諺が次から次へと飛び出してくる。これらの諺は大部分が、上から与えられた規範、教訓とちがいが、民衆の生活体験が生み出したものである点に高い価値がある。しらずしらず伝承した諺を、なにかの経験によって見直し、改めて人生というものを認識しようとするのが、代々にわたって行われたのである。昔話がこの話のように諺を擁護する場合と、昔話が終末で諺によって締めくくられる場合とがあり、両者の関係は密接である。

(益田 勝実)

はなしのふ *Polemonium kiushianum* まれに九州の山地草原に自生するハナシノブ科の多年草。高さ60~100cm, 葉は互生、羽状複葉、小葉は披針形で長さ2~4cm, 中軸には翼がある。花は6~8月、茎頂に円錐花序をつくる。花冠は紫色で5深裂し、裂片の縁と背面に短毛がある。雄しべは5本ある。果実は球形のさく(蒴)である。本州の高山にはこれに似たミヤマハナシノブ *P. nipponicum* がある。花が大きくまばらにつくので区別される。

(佐竹 義輔)

はなしぼん 噺本 江戸時代の笑話を収集・出版した本で、小咄(こぼなし)本、

笑話本とも呼ばれ、おもに江戸を中心に盛行した。もと説話文学系の珍談奇話が展開途上曲折をへて潤色され、こっけい味・風刺味が加えられて初期の噺本が発生したとみられる。元和(1615~24)ころ刊行の《戲言養気集》はその最初とされ、ついで《きのふはけふの物語》《醒睡笑(せいすいしょう)》《私可多咄(しかたばなし)》などが出た。当時の作者は安楽庵策伝、中川喜雲以外は不明である。上掲の作は雑多な話の集成であったが、しだいにこっけいを中心に話が整備体系化され、元禄期(1688~1704)に露の五郎兵衛、鹿野武左衛門らの職業落語家が現われ、《露(つゆ)がはなし》《鹿(しか)の巻筆》その他の作をのこし、また石川流宣編《枝珊瑚珠(えださんごじゅ)》も知られている。当期の作はいったいに上方(かみがた)風の味をもち、叙述はく……と云(いう)た形式の説明型で、体裁は美濃(みの)紙の大本または半紙本であった。やがて当期末に《新話笑眉(しんばなしえみのまゆ)》(1712)が出、会話体の叙述形式をとって過渡の様相を見せ、一方、中国笑話(《笑府》などの)紹介、漢訳笑話の流行が刺激となり、京阪文物の東漸ともあいまち、江戸に安永(1772~81)以後噺本の黄金時代が出現した。簡潔な叙述の軽快洒脱(しゃだつ)な小咄集《鹿(か)の子餅(もち)》《聞上手(ききじょうず)》《楽牽頭(がくだいこ)》などが、体裁も従来の判型を破り、洒落(しゃれ)本または中本の小形で刊行されて大いに流行し、この型が標準となった。作者も当時の有名戯作(げさく)者や狂歌師たちが多く、《寿々葉羅井(すすはらい)》《鯛(たい)の味噌津(みそづ)》《柳巷詠言(やなぎやうぎ)》《富久喜多留(ふくきたる)》その他多くの佳作が続出した。寛政(1789~1801)以後は衰微の傾向を見せ、たんなる言語遊戯や猥(わい)雑に流れ、体裁も標準型がくずれ、黄表紙や合巻本風に変わっていった。作者は山東京伝、十返舎一九らの戯作者のほか、実演家である立川(烏亭)馬馬、林屋正蔵、三笑亭可楽らが輩出しており、また、作品には《無事志有意(ぶじしうい)》《四季の園》《東都真術(とうどもえ)》などがある。なお噺本の題材は能狂言、浮世草子、狂歌、川柳その他の戯作との関連が深い。→小咄

(鈴木 重三)

はなしやこ *Odontodactylus japonicus* 甲殻綱の口脚目(シャコ類)に属し、体の色がこの類中では美しいので、この名がつけられた。体の長さは15cmくらいになり、シャコ類中では大形に属し、雌雄で色が違うので、色だけで雌雄の見分けができる。雌は体の前の部分が紅かった色、後の部分がらん緑色で後端部は特に色が濃く、尾脚の内・外肢は美しい。雄は全体が紅かった色で、尾脚の内・外肢ともに美しい。本州中部以南、西太平洋、インド洋に分布し、やや普通に見られる種類である。

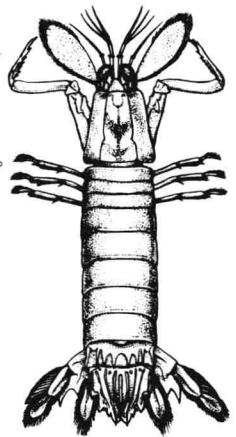
(滝 庸)

はなしゆくしゃ *Hedychium coronarium* ジンジャーともいう。全体がカンナに似ていて、強い芳香のある白花を開く暖地性の栽培植物。インド原産。ショウガ科。茎は高さ90~150cmで、太く丸く、粗大なショウガに似た根茎の節から



噺本《醒睡笑》巻一の巻頭

直立し、大形の葉を2列に互生する。葉身は広楕円形、長さ30cm, 幅5cmくらい、表面は鮮緑色で裏には毛があり、先端が急にとがり、基部は鞘となって互いに重なる。花は茎の頂部に多数穂状に密に着き、花序は繖形形で長さ15~30cm, 幅の広い包葉が〈おおいがわら〉のように並び、その腋(えき)から大形の花を開く。花は白色で径7cm, がくは円筒形で膜質、包葉にかくれ、花冠筒部は細長く5cmくらい、花冠裂片は線形で、他に花弁状の仮雄ずいがあり、しん状片は幅広く、その中心は黄色を帯びる。ずい柱は細長い。→ジンジャー (小山 鉄夫)



ハナシヤコ



ハナシユクシャ